高岡町埋蔵文化財調査報告書39集

高岡麓遺跡（12地点）

産業再配置促進補助事業中央ふれあい広場建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005. 3

宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書39集

高岡麓遺跡（12地点）

産業再配置促進補助事業中央ふれあい広場建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2005. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序　文

この報告書は、産業再配置促進補助事業中央ふれあい広場建設工事に伴い、平成10度に実施した高岡麓遺跡12地点における埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

この調査により、弥生時代後期から近代にかけての遺物や遺構が確認され、特に近世の高岡麓の歴史を解明するうえで多大な成果をあげることができました。

この発掘調査で明らかにされたものは、先人が残した私たちの文化遺産であり、これらの成果を活かしていくことが、我々に課せられた重大な責務と考えております。本書が町内に所在する文化財の保存に資され、また本町の学術資料として学校教育、社会教育などに幅広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係各者より頂いたご指導とご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

平成17年３月

高岡町教育委員会
教育長　中　山　芳　教

例　言

1　本書は、産業再配置促進補助事業中央ふれあい広場建設工事に伴い、高岡町教育委員会が、1998年度（平成10年度）に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　遺物の実測は、[redacted]、藤木晶子、島田正浩、製図は藤木晶子がそれぞれ行い、その他の整理作業については、[redacted]の協力を得た。また、遺物写真は、藤木の協力を得た。

3　本書の方位は磁北、レベルは海抜高である。ただし、国土座標は旧座標を使用しており、レベルも同様である。

4　高岡麓遺跡の遺跡番号は406で、今回の調査地は12地点にあたる。また、遺物の注記は、「遺跡番号－層位－取上番号」を基本とし、遺物は高岡町教育委員会に保管している。

5　陶磁器の鑑定は大橋康二氏（九州陶磁文化館）に依頼した。

6　本書の執筆と編集は島田がおこなった。

目　次

本文目次

Ⅰ　序　　章 …… 7
第１節　はじめに …… 7
１　調査に至る経緯 …… 7
２　調査組織 …… 7
第２節　遺跡の環境 …… 8
１　自然環境 …… 8
２　歴史環境 …… 9
Ⅱ　調　　査 …… 12
第１節　調査の概要 …… 12
１　調査経緯 …… 12
２　調査概要 …… 15
３　包含層 …… 15
第２節　遺構と遺物 …… 15
１　溝状遺構 …… 15
２　建物跡 …… 16
３　土　坑 …… 17
４　整地層 …… 28
Ⅲ　総　　括 …… 33

挿図目次

第１図　遺跡分布図（1/50,000） …… 8
第２図　調査地位置図（1/6,250） …… 10
第３図　包含層出土遺物実測図（1/3） …… 12
第４図　調査区遺構配置図（1/150） …… 13～14
第５図　溝状遺構出土遺物実測図（1/3） …… 15
第６図　ピット出土遺物実測図（1/3） …… 16
第７図　２～４号土坑実測図（1/45） …… 17
第８図　1・5～12号土坑実測図（1/45） …… 18
第９図　1～11号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 19
第10図　14・15号土坑実測図（1/45） …… 20
第11図　14号土坑出土遺物実測図（1/3） …… 21
第12図　15号土坑出土遺物実測図（1）（1/3） …… 22
第13図　15号土坑出土遺物実測図（2）（1/3） …… 23

第14図　15号土坑出土遺物実測図（3）（1/3）…… 24
第15図　15号土坑出土遺物実測図（4）（1/3）…… 25
第16図　15号土坑出土遺物実測図（5）（1/3）…… 26
第17図　15号土坑出土遺物実測図（6）（1/4）…… 27
第18図　整地層出土遺物実測図（1）（1/3）…… 30
第19図　整地層出土遺物実測図（2）（1/3）…… 31

表 目 次

表１　出土遺物観察表（1）…… 16
表２　出土遺物観察表（2）…… 20
表３　出土遺物観察表（3）…… 26
表４　出土遺物観察表（4）…… 29
表５　出土遺物観察表（5）…… 32
表６　報告書登録抄 …… 34

写真図版目次

図版１　調査区遠景、高岡麓遺跡遠景 …… 35
図版２　調査区全景 …… 36
図版３　調査区全景、調査区東側、１号溝状遺構 …… 37
図版４　1・3～5号土坑、１号土坑、３号土坑 …… 38
図版５　４号土坑、５号土坑、８号土坑 …… 39
図版６　10号土坑、11号土坑、１３号土坑 …… 40
図版７　１４号土坑、１５号土坑、包含層堆積状況 …… 41
図版８　遺物写真（包含層、溝状遺構） …… 42
図版９　遺物写真（ピット、１号土坑） …… 43
図版10　遺物写真（1・5・7・11・14号土坑）…… 44
図版11　遺物写真（14号土坑） …… 45
図版12　遺物写真（15号土坑） …… 46
図版13　遺物写真（15号土坑） …… 47
図版14　遺物写真（15号土坑） …… 48
図版15　遺物写真（15号土坑） …… 49
図版16　遺物写真（15号土坑） …… 50
図版17　遺物写真（15号土坑） …… 51
図版18　遺物写真（15号土坑） …… 52
図版19　遺物写真（15号土坑、整地層） …… 53
図版20　遺物写真（整地層） …… 54
図版21　遺物写真（整地層、15号土坑瓦） …… 55

Ⅰ　序　章

第１節　はじめに

１　調査に至る経緯

高岡町では、平成５年に花見工業団地を造成するなど企業誘致に努め、雇用の創出を図っているところである。

調査の契機は、高岡町企画調整課から高岡町教育委員会へ産業再配置促進による中央ふれあい広場造成工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての照会があった。教育委員会は、開発予定地が高岡麓遺跡の範囲内であることから旧商工会跡地を中心に平成９年12月に確認調査を実施した。開発場所は旧商工会跡地並びに南隣の安藤家住宅敷地を含む3,670㎡である。安藤家住宅においては、高岡における武家住宅の代表的なものであることから、教育委員会は、これを保存して公園施設として活用する内容の提案をおこない協議を重ねたが、解体撤去し公園整備をすることになった。また、確認調査の結果、陶磁器類の出土が確認されたため、現況を削平しないで済むような造成計画を求めた。しかし、バリア・フリーを考慮し公園の完成レベルを周辺道路に合わせる必用があることから、造成による削平は余儀なくされた。

教育委員会は、公園工事により削平される約1,220㎡を調査対象として、平成10年５月26日～７月31日に記録保存のための発掘調査を実施した。

２　調査組織

調査主体高岡町教育委員会

調　査　　1998年度（平成10年度）

教　育　長	中山　芳教
社会教育課長	水谷　泰三
社会教育係副主幹	春口　洋子
文化財係長	黒木　敏幸
主任主事	島田　正浩

整　理　　2004年度（平成16年度）

教　育　長	中山　芳教
社会教育課長	小岩崎　正
社会教育係副主幹	上地由紀子
文化財係長	島田　正浩
主　　事	藤木　晶子

また、この調査を実施するにあたり、関係機関をはじめ、地元の方々などのご理解とご協力を頂いた。

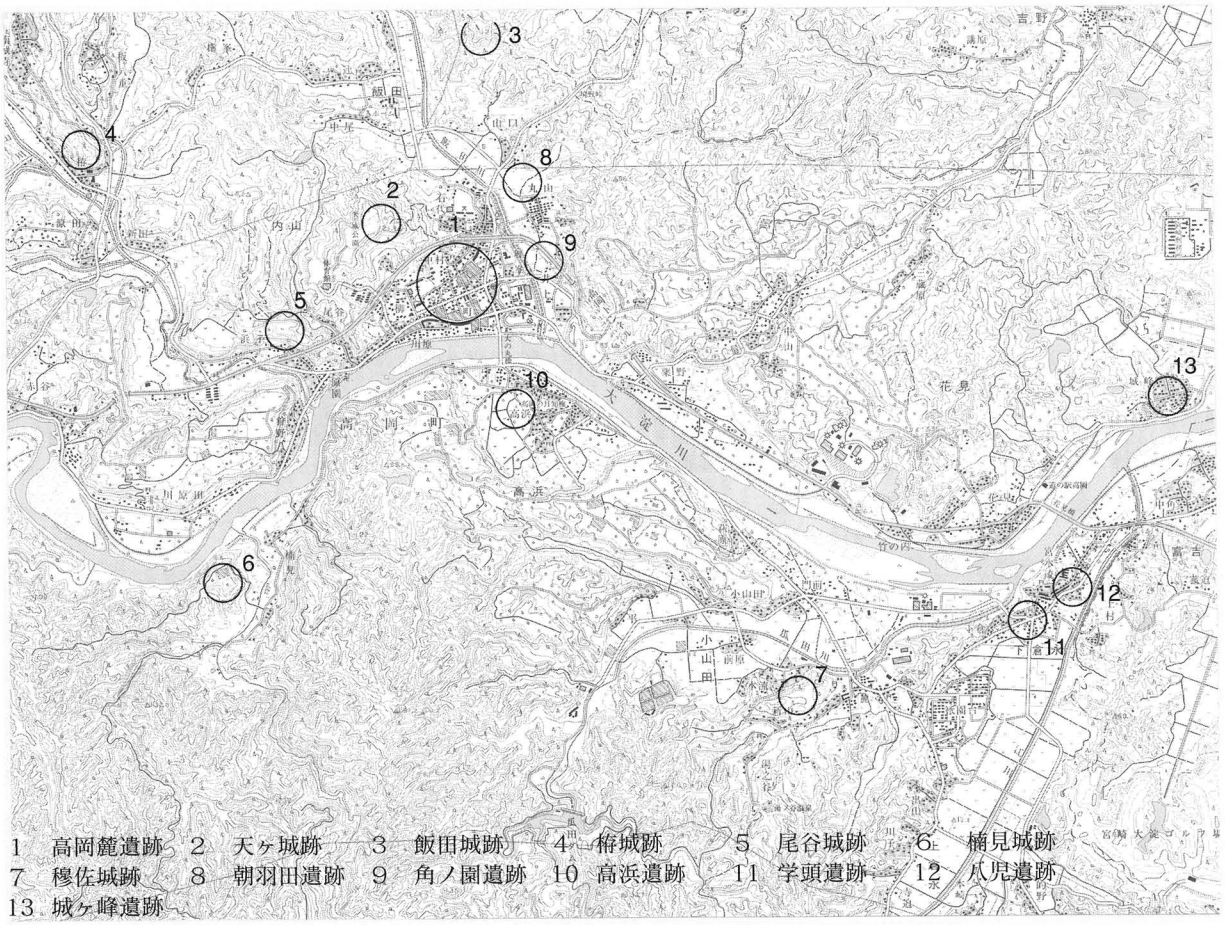
さらに、輸入陶磁器並びに薩摩焼については渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部）、橋口亘（坊津町教育委員会）からご指導を受けた。記して、感謝申し上げる次第である。

第２節　遺跡の環境

1　自然環境

高岡町は山林が70％以上を占める。その町中央を蛇行しながら大淀川が東流し、それによって形成された河岸段丘からその東側に広がる宮崎平野を一望する。この大淀川に起因する自然環境が大きく人々の生活、しいては歴史環境にも影響を与えていた。このような地形を形成する地質について、合原敏幸氏[1]は「高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ１ｍ～２ｍのチャートが見られる。高岡山地西部には、古第三紀の四万十累群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合の覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や暖斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。」（高岡町埋蔵文化財調査報告書12集より抜粋）としている。

この遺跡は、天ヶ城跡の南裾に広がる大淀川と飯田川の合流地点に形成された沖積地に存在する。海



第１図　遺跡分布図（１/50,000）

抜高は約12～15m程で、東側の旧飯田川付近が低く高岡小学校付近が高くなる。大淀川河岸から北側へ150m程までの地盤は砂地で、そこから１段高くなって弱砂性の粘土層が広がる。遺跡の範囲は、基本的に近世の高岡麓を形成した範囲としている。具体的には、東側は旧飯田川を東端とし、西側は浜子地区までで尾谷地区も含む。北側は天ヶ城跡を境とするが、天ヶ城跡の東側は高岡中学校の南側までとする。そして、南側は大淀川河岸までとする。　（1）高岡町役場職員

２　歴史環境

高岡町の遺跡は現在140箇所以上あり、そのほとんどは河川により形成された台地上に位置しているが、最近では低地でも遺跡が確認されている。

旧石器時代

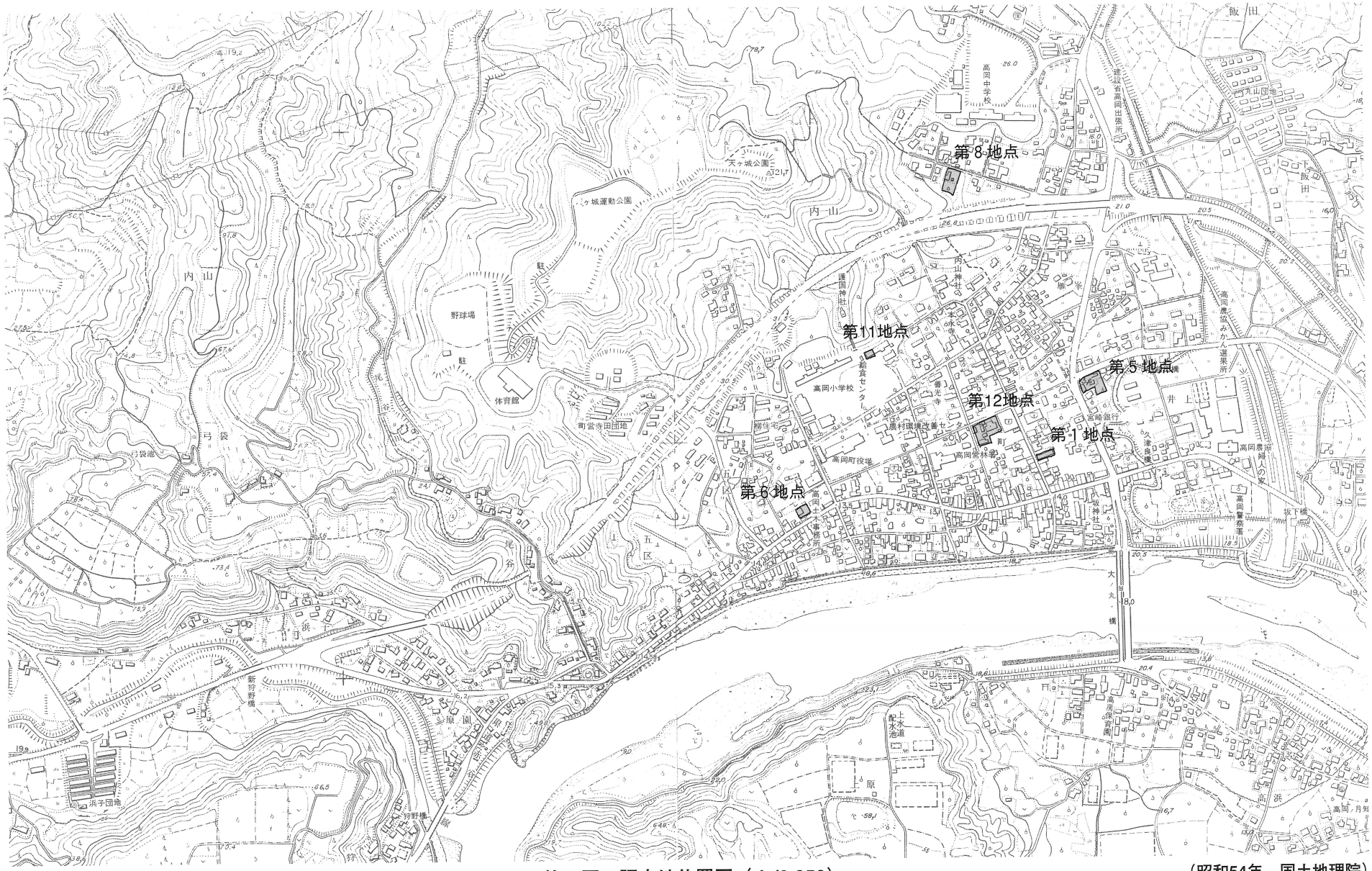
調査は高野原遺跡、向屋敷遺跡、押田遺跡、永迫第２遺跡、小田元第２遺跡で実施されている。高野原遺跡と永迫第２遺跡ではAT下位層が調査され、高野原遺跡からはAT火山灰土層より上位層でナイフ形石器が、下位層（黒色帯）でラウンドスクレイパーが出土している。AT上位層の調査については、向屋敷遺跡では集石遺構とともにナイフ形石器が出土した。また、五女木産の黒曜石が１点のみ確認されている。小田元第２遺跡では細石刃や細石核、角錐状石器、ナイフ形石器、剥片尖頭器等が出土している。また、小田元第２遺跡と押田遺跡から国府型のナイフ型石器が確認されている。

縄文時代

この時代は調査例が多く、草創期も含めてすべての時期で確認されている。なかでも早期の調査例は多く、天ヶ城跡をはじめ、小田元第２遺跡、橋山第１遺跡、橋上遺跡、八久保第２遺跡、榎原遺跡、中原遺跡、高野原遺跡などで調査されている。天ヶ城跡では、押型文土器と桑ノ丸式土器が大半を占め、その両者の折衷土器も出土している。永迫第２遺跡では、アカホヤより下層から轟木１式と共に玦状耳飾りが出土した。石器石材では、交易圏を考察する資料となる黒耀石は九州島各地のものが出土しておりデータの蓄積をおこなっている。また、サヌカイトにおいても、多久産の他に金山産のものが出土している。早期の遺構については、集石遺構と陥し穴状遺構が中心で住居跡は検出されていない。高野原遺跡では、縄文早期の陥し穴状遺構が確認された。また、永迫第２遺跡では、同様の陥し穴状遺構と共に石器生産を思わせる剥片の出土状況が確認された。前期は久木野遺跡第１区、永迫第１遺跡、永迫第２遺跡で包含層から轟Ｂ式や曽畑式が出土している。中期は去川山下遺跡から春日式、久木野遺跡で春日、大平、岩崎下層の各形式のものが出土している。後期は橋山第１遺跡で阿高系の土器や疑似縄文の土器が出土した。さらに久木野遺跡では円形竪穴住居跡とともに北久根山式が出土している。城ヶ峰遺跡では市来式や北久根山式が出土した。的野遺跡からは綾式を含む疑似縄文の土器が出土した。また、表採資料ではあるが山子遺跡、赤木遺跡等でも確認されている。晩期は学頭遺跡で黒色磨研土器が出土している。学頭遺跡では糸魚川産ヒスイを石材とした勾玉が出土している。

弥生時代

調査された遺跡はⅣ～Ⅴ期が中心でⅠ期の調査例はない。標高15メートル程の微高地状のところに位置する学頭遺跡からは、断面Ⅴ字状を呈する溝状遺構や竪穴住居跡が検出された。学頭遺跡より約２Ｋｍ程南に位置する的野遺跡からは、Ⅳ～Ⅴ期の包含層と同時期の溝状遺構や２段掘の土壙墓が検出された。また、丹後堀遺跡からはⅢ～Ⅳ期の竪穴住居跡が検出されている。



第２図　調査地位置図（１/6,250）

（昭和54年　国土地理院）

古墳時代

調査は、まず、住居址の調査としては八児遺跡や高岡麓遺跡第５地点がある。高岡麓遺跡では２軒の竪穴住居跡が検出され５世紀中頃に比定されている。また、八児遺跡は側壁にカマドが付設された竪穴住居跡（７世紀代）などが12軒以上検出された。両遺跡とも標高がほぼ同じで大淀川の氾濫源である低地に位置しており、農耕集落の一端をみることが出来る。次に墳墓の調査としては久木野地下式横穴墓群がある。今まで４基の調査が実施され、人骨とともに鉄斧や玉類が出土し６世紀前半としている。また、町内には３基の県指定古墳がある。その古墳周辺で耕作中に壷が２点と鉄製品が発見されている。

古代

高岡周辺は承平年間（931～938年）の和名抄によると、その当時は「穆佐郷」といわれていた。蕨野遺跡で、大淀川北岸の丘陵（大字花見）に位置し、９世紀後半以降の土師器の椀、皿（杯）などを生産した焼成遺構が６基以上検出された。また、三生江遺跡や的野遺跡では、土師器の椀、皿（杯）などの他、越州窯系青磁碗をはじめ灰釉陶器皿・埦（猿投）や緑釉陶器皿（洛西、周防）が多く出土している。また、９世紀から10世紀にかけての高台付き土師器椀の底部に放射状の条痕もしくは圧痕を残したものがあり、宮崎平野を中心とする特徴的な遺物である。この時期の遺跡調査数は急激に増加し、高岡麓遺跡、八反田遺跡、永迫第２遺跡等でも確認されている。

中世

建久図田帳によると高岡は、12世紀には「島津庄穆佐院」といわれていた。その後、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の対立を迎える。その中心となったのが穆佐城である。穆佐城は足利尊氏が九州の拠点としたことからはじまる。平成３年には穆佐城の縄張り調査を実施し、南九州特有の特徴をもつと共に機能分化のみられる山城であることがわかった。調査は、今年度までに８次からなる調査を実施した。その結果、14世紀後半から16世紀末までの遺物が出土しており、特に15世紀後半から16世紀末の遺物が集中している。その西側に位置する梅木田遺跡では、桜島文明軽石層に覆われた溝が検出され、木製品等が出土している。

近世

中世までは高岡の中心地は穆佐城周辺だったのに対して江戸期になると天ヶ城周辺に一変する。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡は、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋群に分割されている。

この遺跡の本調査は、１地点、５地点、６地点、８地点、11地点、22地点、25地点（16年度調査）、そしてこの12地点である。それ以外は、確認調査や立ち会い調査等で処置されている。まず、１地点は町屋区域の調査で、火災跡の焼土層と18世紀代の井戸が検出された。５地点は高岡郵便局が在るところで、県教育委員会が調査をおこなっている。その結果、古墳時代後期の住居跡をはじめ、17世紀前半からの遺物も出土している。６地点は高岡土木事務所南側の個人住宅で、色絵碗が出土している。８地点は石代という地区名が残るところで宅地分譲地であり18世紀後半の整地層が確認された。未整理箇所としては、11地点はトレーニングセンターが在る所、22地点は健康福祉センター「穆園館」が在る所で、近世、古代の遺構や遺物が出土している。25地点は高岡小学校花壇や校舎建設予定地である。

12地点は、江戸時代は郷士である「中村家」の敷地で、その後営林署から高岡町商工会議所へと変遷していることが記録から判明している。

II　調　査

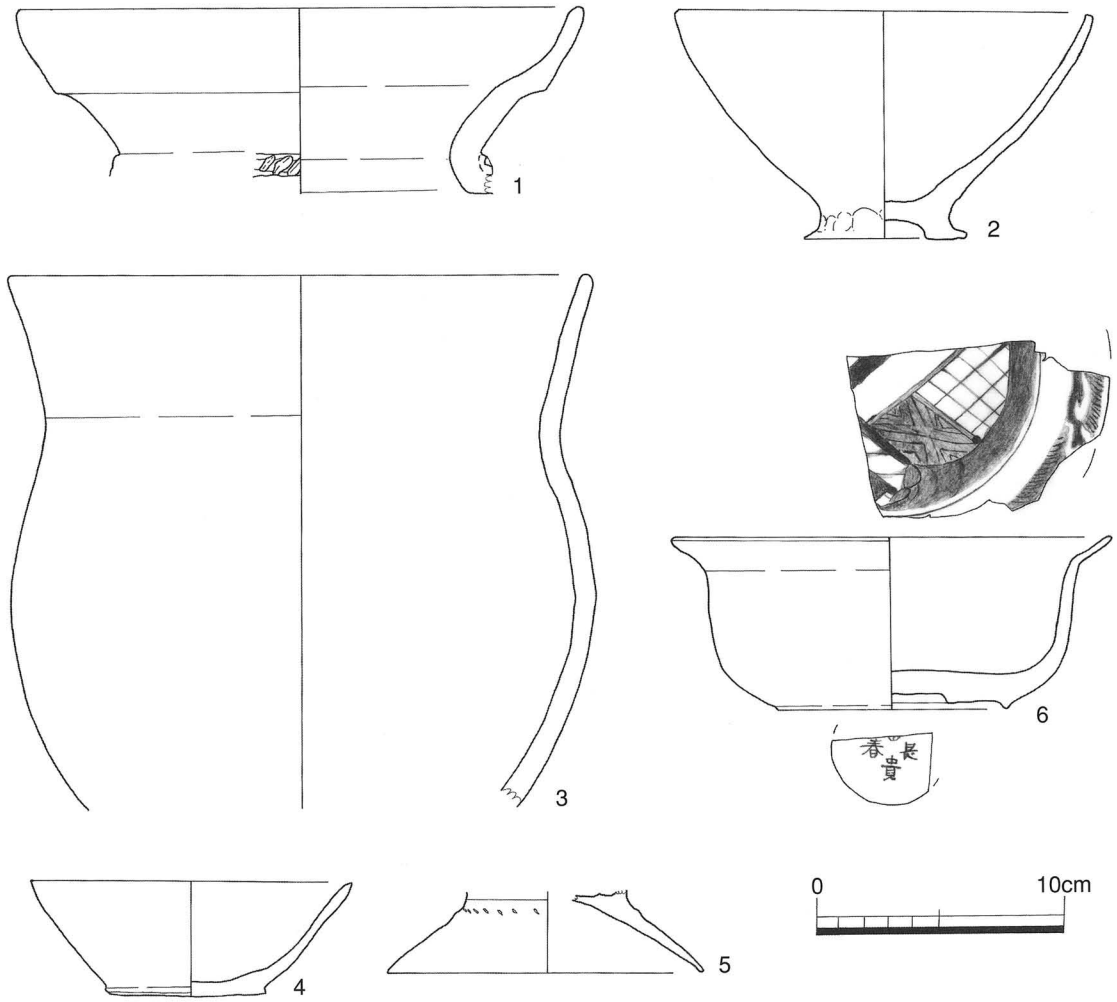
第１節　調査の概要

1　調査経緯

高岡麓遺跡は、平成16年度までに25箇所の開発地で対応しており、ここは12地点として対応した。

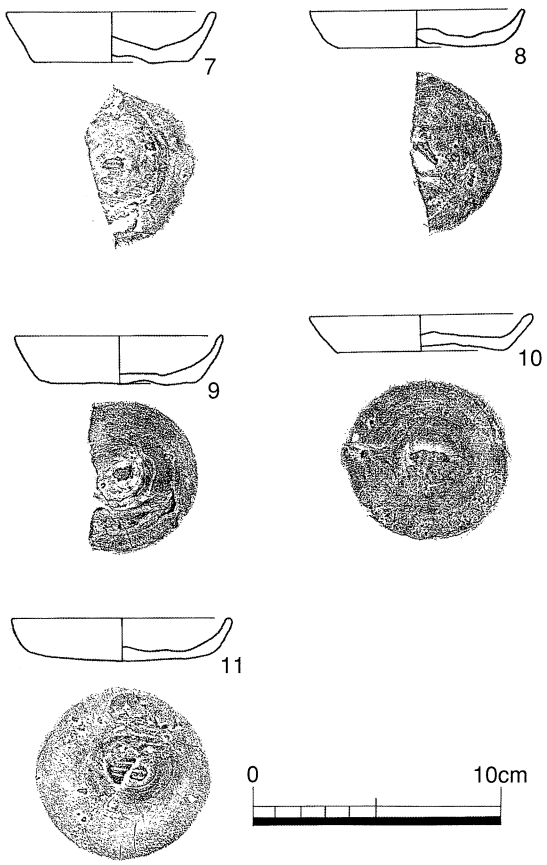
調査は、平成10年５月に既存建造物の撤去に伴う立ち会いを行い、その作業が終了後の６月１日から５日までの４日間にかけて重機による表土剥ぎを行った。調査区西側は約0.3mで遺構検出面を確認できたが、調査区南東側は1m近くまでになる。調査区全域で建物基礎や多くの攪乱坑が確認された。

大規模な攪乱坑については、諸般の事情により掘削しないものとした。遺構検出と遺構掘削は、南側から順次行い、並行して全体図の実測及び遺構実測を行った。７月15日には空中写真撮影を行い、21日からは下層面の確認のため、第２層の掘削を調査区西側で実施し遺構検出を行った。さらに調査区南側を除いた範囲で、第３層を掘削した。最後に遺構全体図の補足を行い、７月31日には器材等の撤収を終了した。



第３図　包含層出土遺物実測図（1/3）

第4図　調査区遺構配置図（1/150）



第５図　溝状遺構出土遺物実測図（1/3）

２　調査概要

調査地は高岡町大字内山2865-1番地及び大字五町265-1、265、266-2番地で、調査対象面積は1,874㎡である。その調査地の約1220㎡について調査を実施した。調査地は、大淀川流域に数層からなる包含層が形成されている。その包含層の第２～第３層は、中世から近世の遺構や遺物が確認でき、溝状遺構３条、土坑15基、建物跡１棟、ピット多数が検出された。ただ、各遺構の時期設定が困難であり、特にピットにおいてはその傾向が強い。第４層においては遺構は全く確認されていない。遺物は、弥生時代後期以降のものが出土しており、近世においては江戸時代初期の段階からの遺物が確認される。

３　包含層

遺跡が大淀川と飯田川の合流地付近であることから、自然堆積による包含層を形成している。

表土の下に遺構検出面である淡褐色弱砂性土（第１層）と青灰色粘土を含む層（第２層）は、西側で厚く東側に浅く延びるが南側は堆積しない。東側は地形的にも低くなり、淡褐色粘土層（第３層）が遺構検出面となる。この第３層の下には粘土と砂が混入した層（第４層）があり白色砂粒混入砂性土（第５層）へと続く。遺物は、かなりの混入がみられるものの、大まかには第２～第３層は近世まで、第４層は古代まで、第５層は古墳時代までのものがみられる。また、第１層からは獣骨製ブラシが出土している。

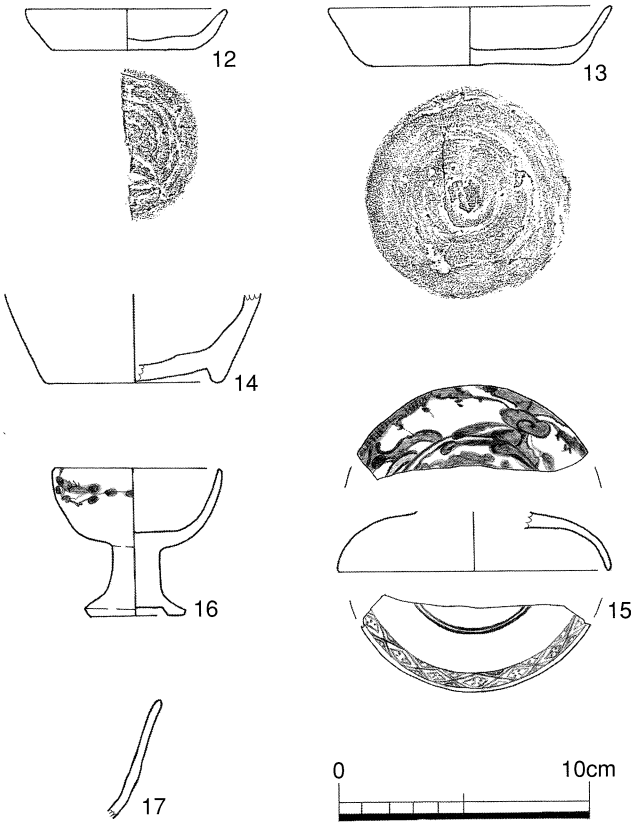
第２節　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は時期不明なものが多いため、各遺構ごとに報告する。

１　溝状遺構

溝状遺構は、３条検出した。

１号溝状遺構（第４図）この遺構は調査区東端で検出された。遺構幅約1.2m、長さ約４mでさらに東側に延びる様相を示す。平面全体では数カ所攪乱坑等により削平を受け、その一部は床面まで達している。床面は東側から西側にかけて低くなり、なだらかな凹凸が見られる。壁面はしっかりしており、南側はテラスを形成しながら立ち上がる。埋土は大きく４つに分層されるが、最上層は灰黄色土を呈し攪乱が激しく不安定で、最下層は淡灰色粘性土で約0.1m程堆積している。その最下層を中心に土師器小皿（７～11）が出土している。11だけは上位層からの出土で、それ以外は床面直上もしくは最下層の出土である。小皿の法量平均は、口径8.5cm、底径6.4cm、器高1.7cmで、底部切り離しはすべてヘラ切りである。体部は内湾気味に立ち上がり、底部は中央部分で盛り上がる。底部から体部にかけての稜が不明瞭なものがある。



第６図　ピット出土遺物実測図（1/3）

２号溝状遺構（第４図）　この遺構は調査区中央で検出された。主軸を南北方向に持つ。幅約1.1～1.5m、長さ約15.5m以上で、北側の調査区外に延びる。深さは約0.05～0.15mでかなり浅く、壁面も緩やかなところが多い。自然流路的ではあるが、床面に極端な凹凸は無く、この遺構の方向等を考えると区画的要素を持った遺構ともいえる。遺物は土師器片や陶器片が数点出土したのみで、時期は不明である。

３号溝状遺構（第４図）　この遺構は２号溝状遺構の南側で検出された。溝の幅は約0.9m、長さ1.1mで北側が攪乱坑により削平される。深さも浅く、２号溝状遺構と一連のものと推定される。遺物は出土していない。

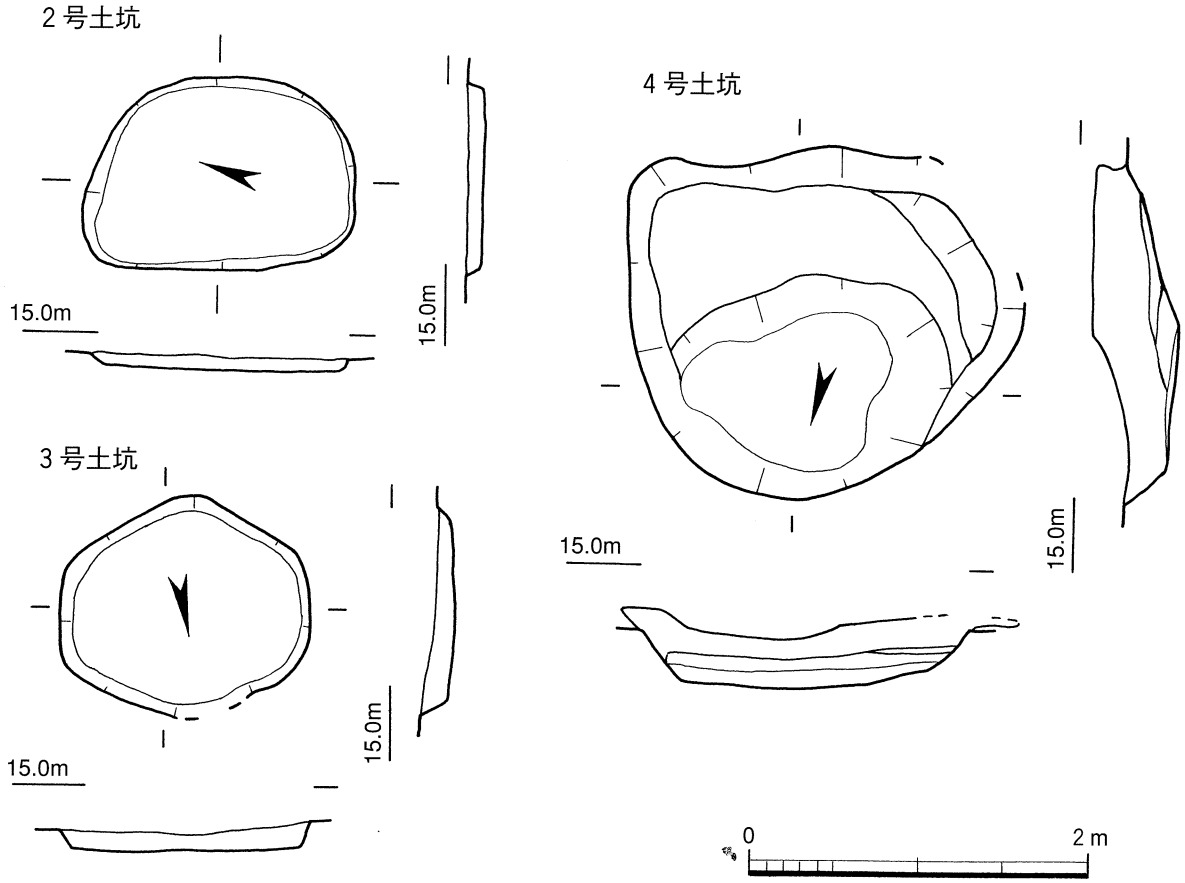
２　建物跡

ピットは381基以上検出したが、調査区の

表１　出土遺物観察表（１）

遺物No.	写真図版	出土地	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	色調 外	内	生産地　時期　胎土　その他
1	8	５層	土師器	壷	(22)	－	－	口縁部1/4	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm弱の白色粒・茶色粒・黒色粒を含む
2	8	４層	土師器	鉢	16	6	9	完形	浅い黄橙色	黄橙色	1mm大の茶色粒・灰色粒、1mm弱透明粒を含む
3	8	５層	土師器	甕	23	－	－	口縁～体部	浅い黄橙色	浅い黄橙色	1mm大黒色粒を含む　1mm弱透明粒を含む
4	8	４層	土師器	杯	13	6	5	5/6	灰白色	浅い黄橙色	1mm弱の透明粒を含む　ヘラ切り
5	8	４層	土師器	蓋	(12)	－	－	1/3	橙色	浅い黄橙色	1mm弱の灰色粒・茶色粒を含む
6	8	２層	磁器	皿	(17)	(9)	7	1/4	明緑灰色釉	透明釉	肥前系　青磁染付　18C後半　底裏銘「冨貴長春」
7	8	SD1	土師器	小皿	(8)	(6)	2	1/2	橙色	橙色	ヘラ切り
8	8	SD1	土師器	小皿	(8)	(6)	2	1/2	浅い黄橙色	浅い黄橙色	1mm弱の茶色粒を含む　ヘラ切り
9	8	SD1	土師器	小皿	(8)	(6)	2	1/2	灰白色	浅い黄橙色	1mm弱の茶色粒・灰色粒を少し含む　ヘラ切り
10	8	SD1	土師器	小皿	9	7	2	完形	浅い黄橙色	淡橙色	1mm弱の茶色粒を少し含む　ヘラ切り
11	8	SD1	土師器	小皿	9	7	2	完形	浅い黄橙色	浅い黄橙色	1mm弱の茶色粒を含む　ヘラ切り
12	9	P110	土師器	小皿	(8)	(6)	2	1/2	浅い黄橙色	浅い黄橙色	1mm弱の茶色粒・灰色粒を含む　ヘラ切り
13	9	P125	土師器	杯	(11)	8	2	口縁部1/2を欠く	にぶい橙色	にぶい橙色	1mm大の茶色粒を含む　ヘラ切り
14	－	P6	磁器	瓶	－	(7)	－	底部1/8	透明釉	灰白色（無釉）	肥前系　1610～40年代　砂目
15	9	P113	磁器	碗蓋	(11)	－	－	口縁部1/3	灰白色（2次焼成?）	透明釉	肥前系　染付　18c後半
16	9	P36	磁器	仏飯器	(7)	6	4	口縁部3/4を欠く	透明釉	透明釉	肥前系　染付　18c代
17	9	P8	陶器	碗	－	－	－	口縁部1/8	黒褐色	黒褐色	福岡？　鉄絵　17c～18c

SD：溝状遺構　　P：ピット



第７図　２～４号土坑実測図（１/45）

東側に集中していた。ただし、掘立柱建物として並行に並ぶような状況のピットはほとんどなかった。ピットの径は0.15～0.25mがほとんどである。深さも浅いもので0.05m程度のものもあるが、約0.2～0.3mである。ピットの埋土は色調によって７種類に分けられるが、遺物の出土状況が悪いため、時期を把握するまでには至らなかった。また、径0.4m以上のピットの中には、柱痕？が認められ焼土が混入しているものがあった。

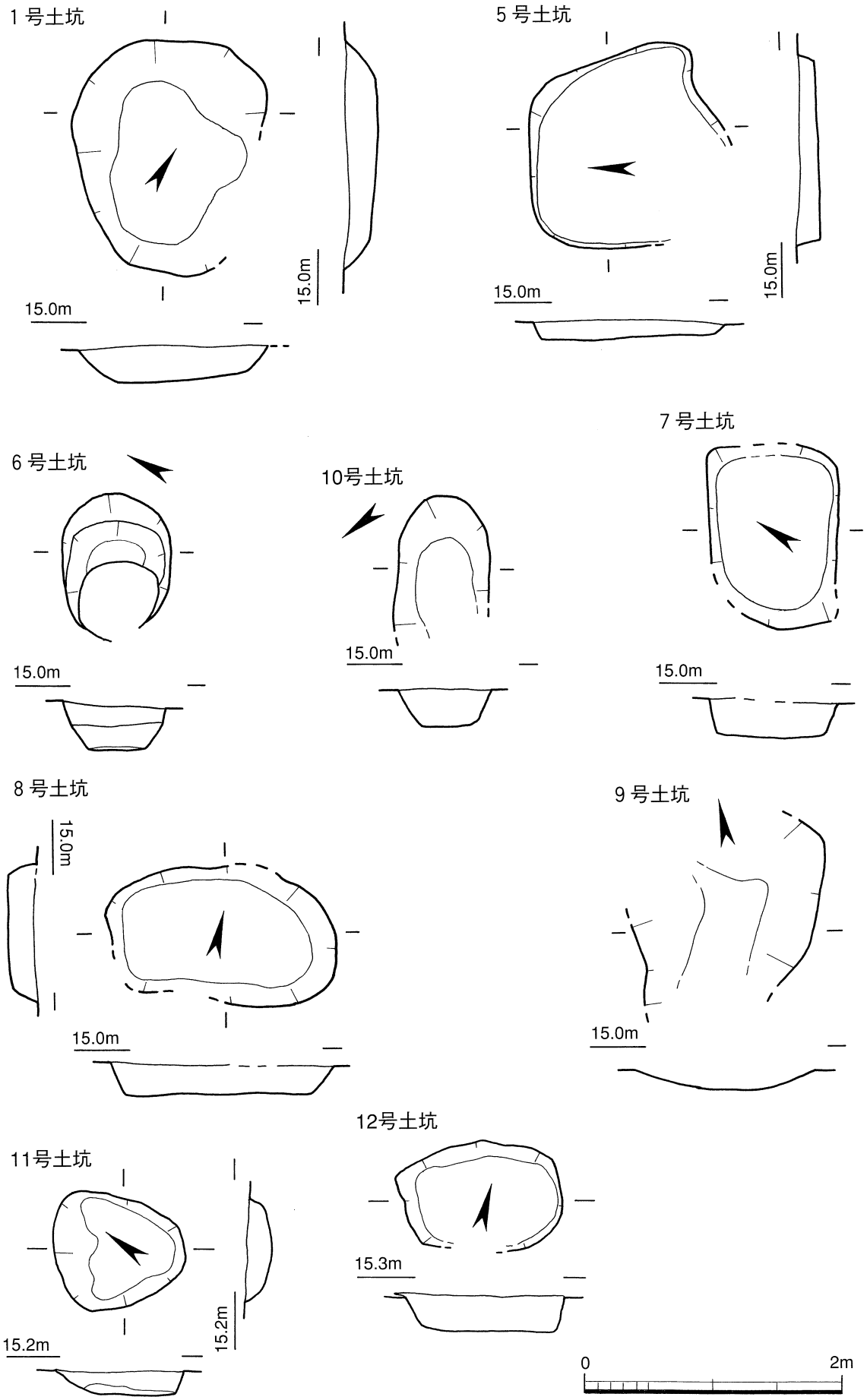
１号建物（第４図）　調査区東側の布基礎に並行するピットをもって、１×３間の建物跡とした。規模は、桁行約６m、染行約２mの１間幅約２mで、調査区の制約により北側と東側に広がる可能性がある。このピットのいくつかは、床面に砂と小礫が浅く堆積していたがそれに伴う底石等は確認されていない。P36から遺物（16）が出土しており、その時期以降の遺構である。

３　土坑

土坑は15基検出したが、13号土坑は現代遺構であることが掘削後に確認されたため、実測図は未掲載とした。

１号土坑（第８図）　この遺構は、調査区南東側で検出された。長軸約1.8m、短軸1.5mの卵形プランの土坑で、４号土坑を切る。また、東側の一部は攪乱坑により削平される。床面は平坦で壁の立ち上がりはしっかりしている。埋土は明黄褐色粘性土である。出土遺物は22のようにやや古手のものもあるが、17世紀前半代の遺物が集中している。また、肥前系の錆釉陶器も出土している。

２号土坑（第７図）　この遺構は、調査区中央の２号溝状遺構を切る状態で検出された。長軸1.6m、短軸1.15mの形が崩れた長方形状プランを呈する。床面は平坦であるが、深さが浅く残り具合が悪い。



第 8 図　1 ・ 5 ～12号土坑実測図（ 1 /45）

出土遺物は肥前系のタタキ目をもつ甕や擂鉢が出土している。いずれも17世紀代であるが、遺構に伴うものかどうかははっきりしない。

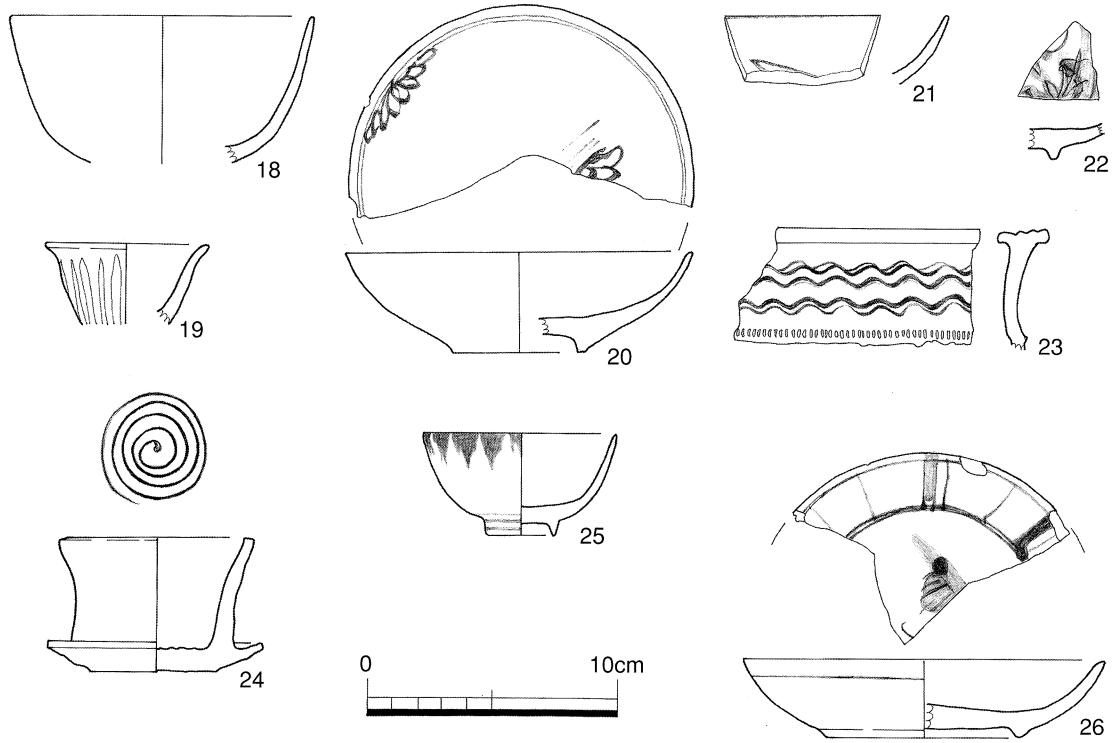
3号土坑（第７図）　この遺構は、調査区南東側で検出された。長軸約1.5m、短軸約1.3mの不定形土坑で、北側で４号土坑に切られる。床面は平坦であるが、２号土坑と同じで浅い。埋土からは拳大から頭大程の礫が多く出土したが、施設を意識した出土状況ではない。その他の遺物は出土しなかった。

4号土坑（第７図）　この遺構は調査区南東側で検出された、幅約2.1～2.5mの不定形土坑である。南側で３号土坑を切り、東側で１号土坑、西側で５号土坑、更に北側で攪乱坑により切られる。床面は北側に向かって深く傾斜し、その傾斜面で緩やかなテラスを形成する。遺物は陶器の小片が１点のみ出土した。

5号土坑（第８図）　この遺構は、調査区南東側で検出された。幅約1.5m以上の不定形プランで、東側で４号土坑を切り、東側で攪乱坑に切られる。床面は平坦であるが、深さは0.15mと浅い。遺物（24）は、口縁端部と底部外面は無釉である。その他に肥前系の刷毛目瓶が出土している。また、17ｃ前半の肥前灰釉碗や青磁碗が出土しているが、埋土混入であろう。

6号土坑（第８図）　この遺構は、調査区の東側で検出された。西側をピットで大きく切られているが、長軸約1.1m、短軸約8.5mの楕円形プランの土坑である。床面の状況は残り具合からは平坦と思われる。壁面は約45度の傾斜で0.2m程立ち上がり、そこから屈曲して約80度の傾斜で立ち上がる。遺物は唐津の溝縁皿（1610～30年）が出土している。

7号土坑（第８図）　調査区東側で検出された。土坑の西側と南側の角でピットに切られ、さらに東側で小さな攪乱坑により切られるが、長方形プランの土坑である。床面は平坦で、壁面もしっかりしている。遺物（25）は18世紀前半で、畳付部分は施釉しない。また、波佐見の青磁染付碗小片や、埋土上部からは1600年～1630年の唐津の陶器碗が出土している。



第９図　１～11号土坑出土遺物実測図（１/３）

表２　出土遺物観察表（２）

遺物No.	写真図版	出土地	種別	器種	法量（cm）			残存率	生産地　時期　胎土　その他
					口径	底径	器高		
18	－	SC1	磁器	青磁碗	(12.0)	－	－	1/4	肥前系　１６３０～４０年　明緑灰色（釉）　２次焼成？
19	9	SC1	磁器	白磁小杯	(6.4)	－	－	1/3	肥前系　1630～40年　　鎬文
20	9	SC1	磁器	染付小皿	13.5	7.6	3.9	1/2	肥前系　1610～40年　畳付無釉　砂目積み？
21	9	SC1	磁器	青磁皿	－	－	－	－	肥前系　1630～40年　陰刻文　明緑灰色釉　口紅
22	9	SC1	磁器	青花皿	－	－	－	－	福建省系　1590～1630年　砂目積み？
23	10	SC1	陶器	鉢	－	－	－	－	肥前系　17c~18c前半　二彩　鉄釉と銅緑釉を掛け分け（残存部分は銅緑釉）
24	10	SC5	陶器	灯火器	7.8	4.9	5.3	完形	薩　摩　１８c　灰オリーブ色（鉄釉）　橙色（胎土）
25	10	SC7	磁器	染付小杯	7.5	2.7	4.0	3/4	肥前系　１８c前半　雨降文　焼成不良か？
26	10	SC11	磁器	染付皿	(14.2)	(7.6)	3.0	1/4	肥前系　1630～40年

SC：土坑

８号土坑（第８図）　調査区東側で検出された。この土坑は、南北さらに南西側でピットに切られるが、長軸約1.7m、短軸約1.1mの隅丸状の長方形プランである。床面は平坦に近く、壁面はしっかりしている。遺物は出土していない。

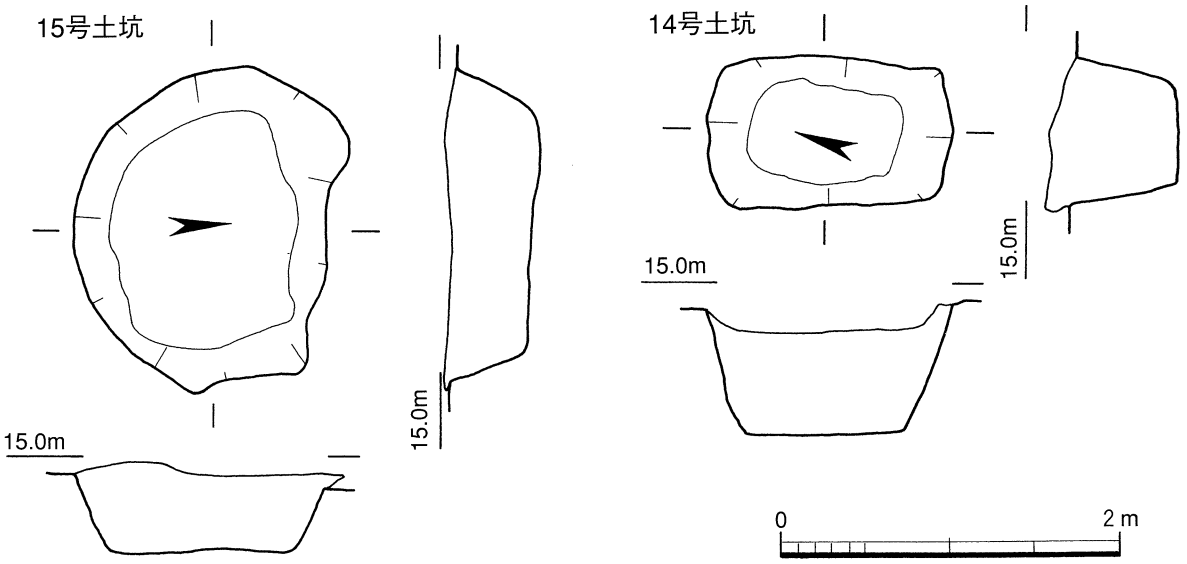
９号土坑（第８図）　この遺構は、調査区の南東側で検出された。南北を攪乱坑により切られ、プラン自体は明確でない。遺物の出土もない。

10号土坑（第８図）　この土坑は短軸約0.7mを計るが、西側を攪乱坑により切られ、長軸は計測できない。床面は平坦で、壁面は約60～70度の傾斜で立ち上がる。遺物は土師器片が数点出土している。

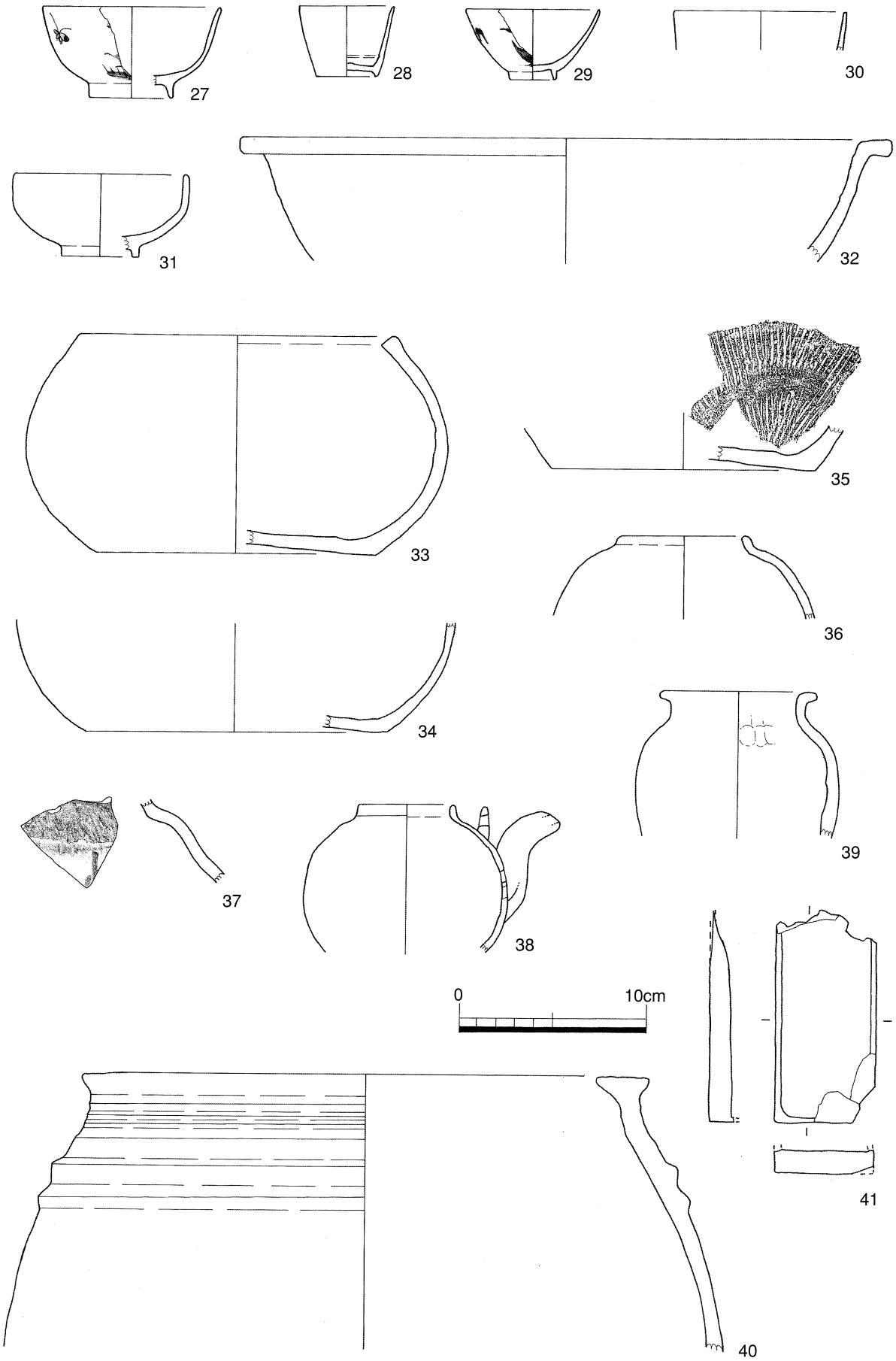
11号土坑（第８図）　長軸約1.1m、短軸約0.9mのおむすび状のプランである。床面は中央部がやや深くなるがプランはやや崩れ気味である。壁面も部分的になだらかな立ち上がりの所がある。遺物(26)は17世紀前半のもので高台付近は施釉しない。

12号土坑（第８図）　この土坑は長軸約1.25m、短軸は南側をピットにより切られるが0.8m前後の長方形状の土坑である。床面は平坦で壁面はしっかりしている。遺物は出土していない。

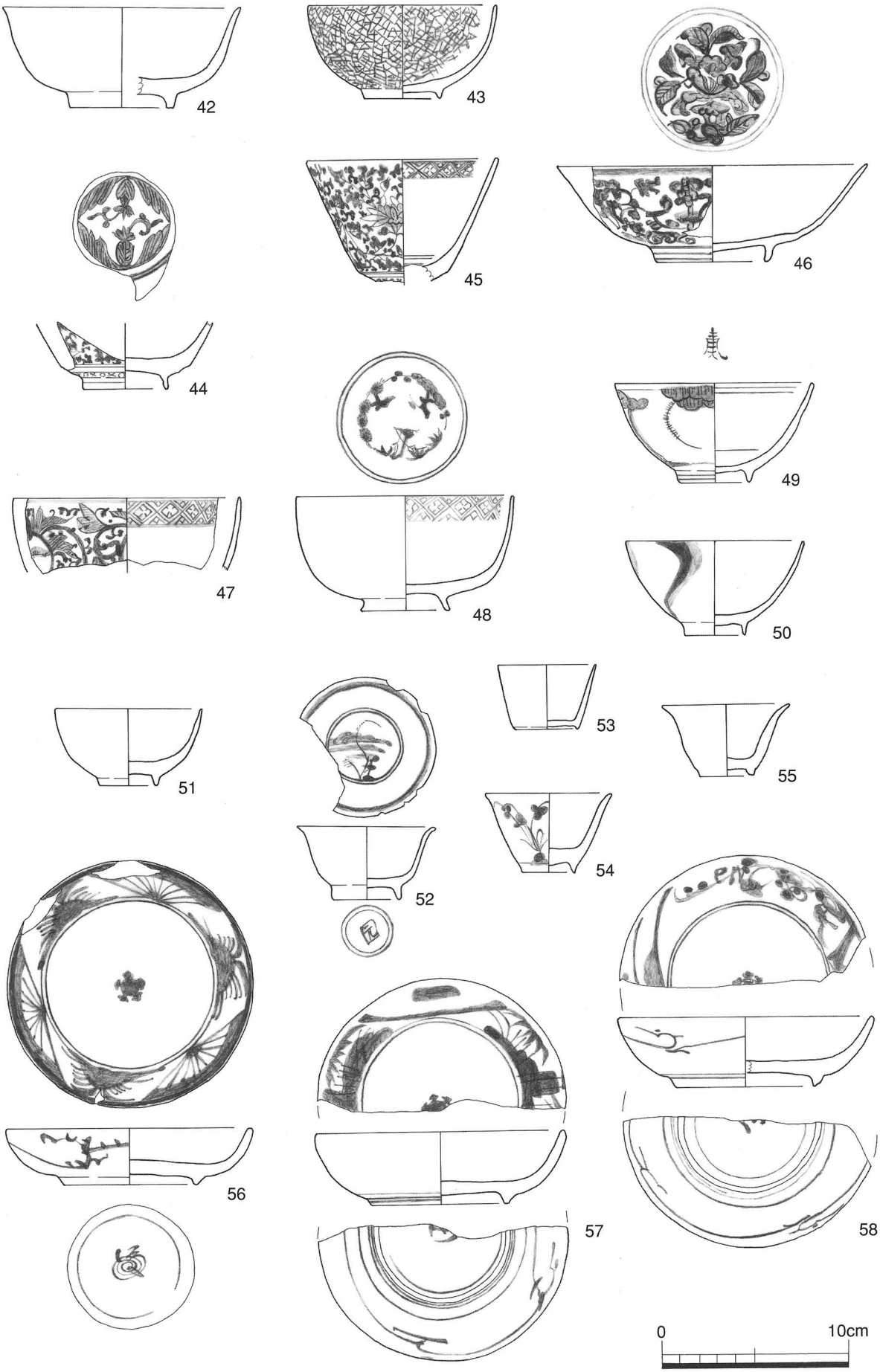
13号土坑（第４図）　この土坑は、近･現代の遺構である。西側上面を大きく攪乱坑により削平される。長さ約３mの方形状のプランを持った土坑で、床面は平坦で壁面はしっかりと立ち上がる。埋土から近現代の遺物が確認されている。



第10図　14・15号土坑実測図（１/45）



第11図　14号土坑出土遺物実測図（1/3）

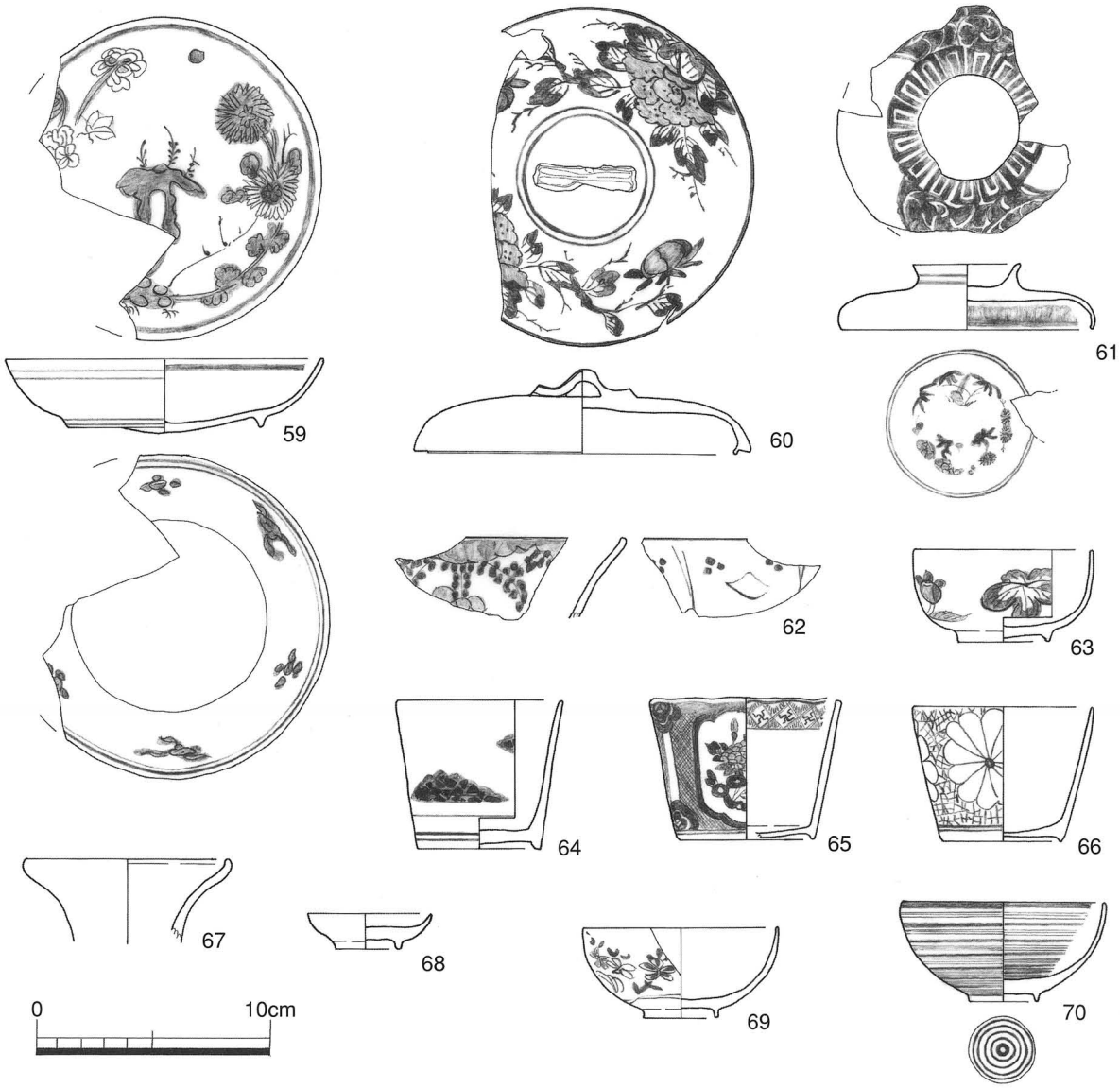


第12図　15号土坑出土遺物実測図（1）（1/3）

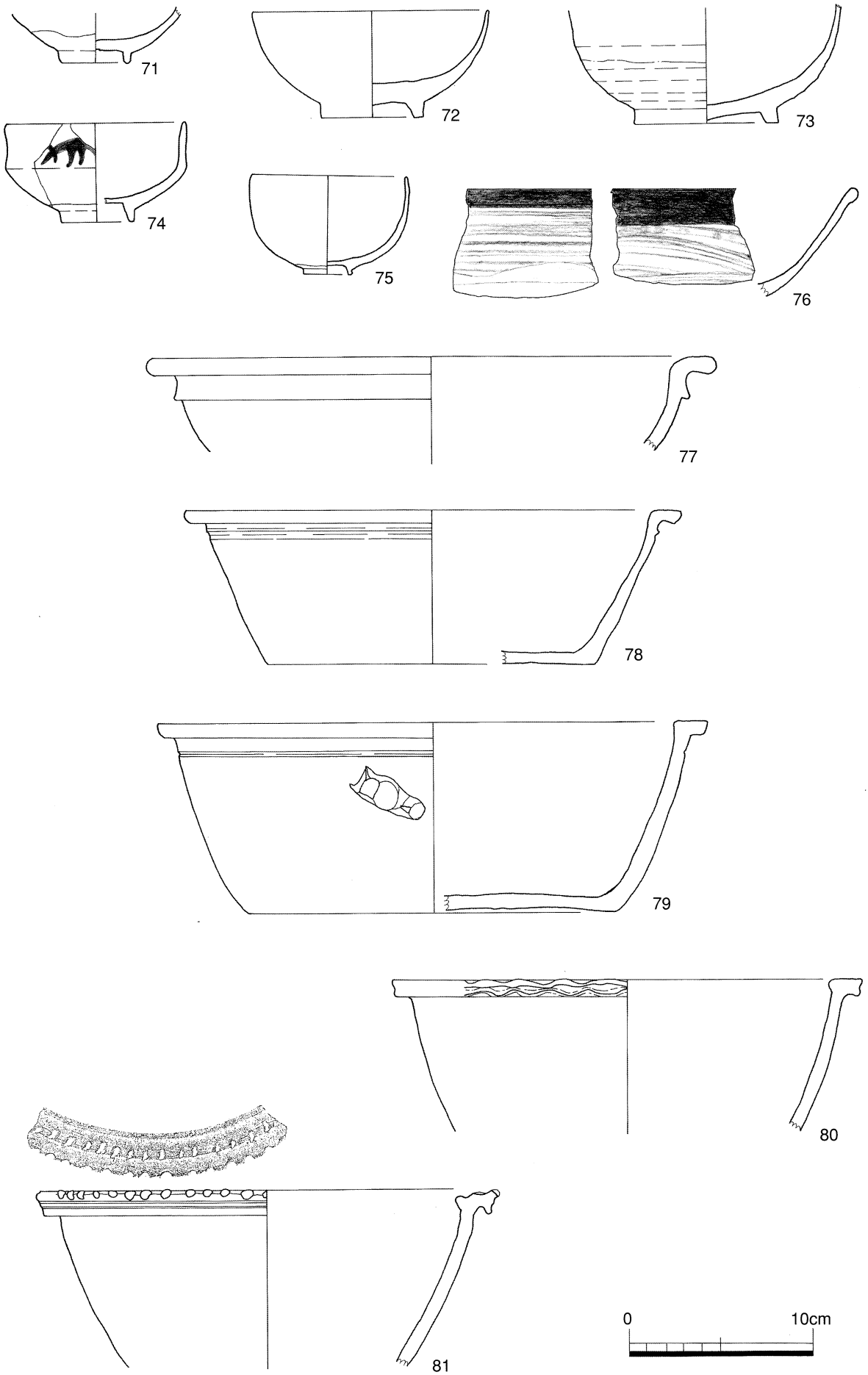
14号土坑（第10図）　この土坑は２号溝状遺構の西側に位置し一部上面を攪乱坑により削られる。長軸約1.5m、短軸約0.9mを計る隅丸の長方形プランである。深さは約0.7mを計り、床面は平坦である。壁面は約70度の傾斜で立ち上がる。

遺物は、磁器は少なく破片を含めて21点しか出土しておらず、出土遺物の中心は陶器類である。時期は18世紀後半のものも多く出土しているが、19世紀初頭から前半のものが中心であり、この遺構もその時期以降に位置付けられよう。

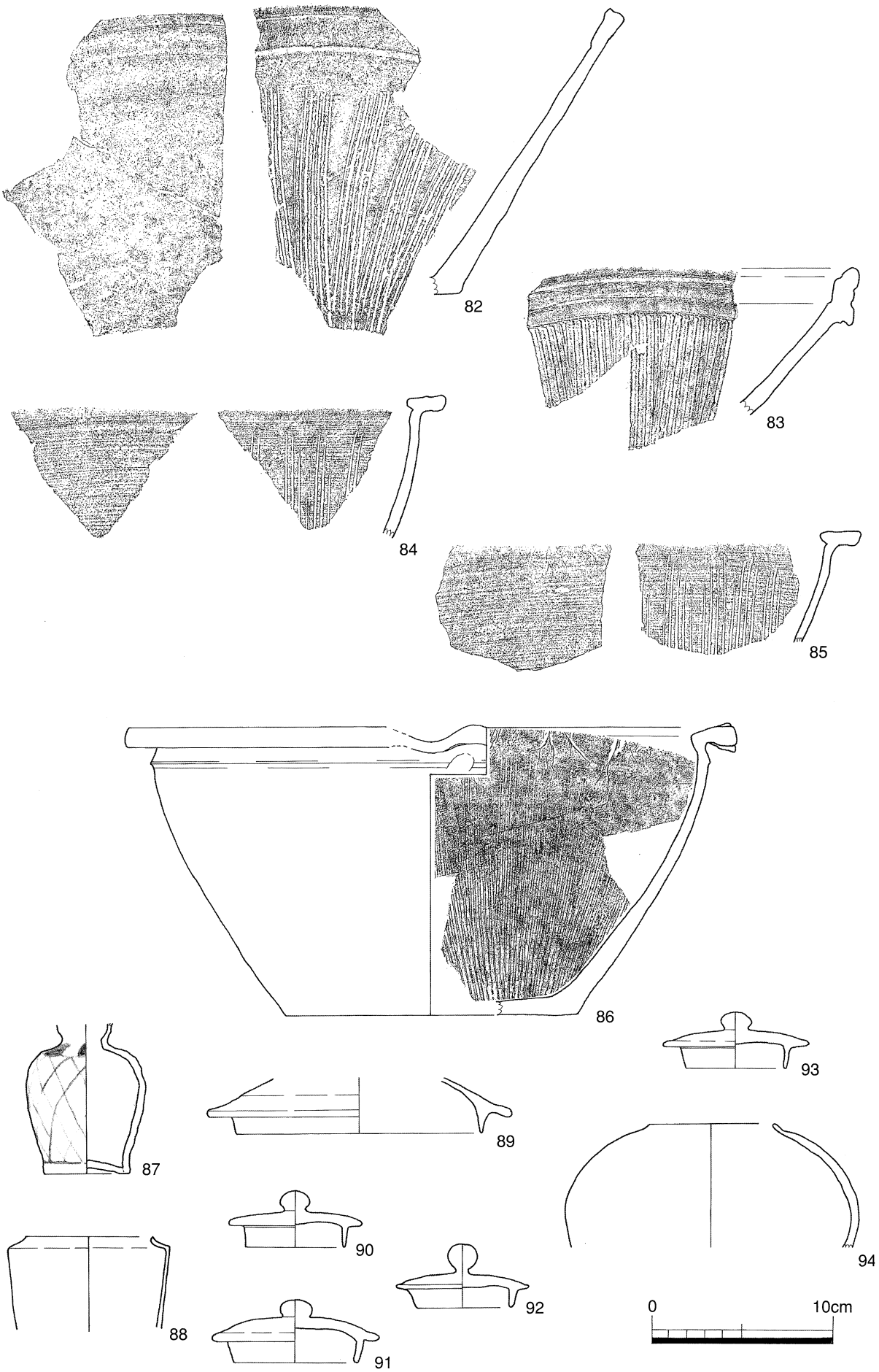
27～30は磁器で、30は瀬戸美濃方面の可能性がある。その他に染付皿、猪口、袋物が出土しているが、肥前系のものがほとんどである。陶器は碗、大皿、鉢、擂鉢、土瓶類、甕が出土している。産地は肥前をはじめ、福岡（大分県小鹿田を含む）、薩摩、関西、瀬戸美濃などである。31は京焼風陶器の流れである。32～34は苗代川の鉢である。32は口縁部上面は施釉しない。33は胴部が張る器形で最大径22.2cmを計る。内面は全釉で、口縁端部と底部外面は施釉しない。34も底部外面は施釉しない。35は苗代川の擂鉢で、内面は部分的に釉が掛かるが底部外面は施釉しない。擂鉢は関西系（堺？）のものも出土している。37は鉄釉と灰釉をかけ分けたもので福岡系統のものと思われる。38はやや扁平な球



第13図　15号土坑出土遺物実測図（2）（1/3）



第14図　15号土坑出土遺物実測図（3）（1/3）



第15図　15号土坑出土遺物実測図（4）（1/3）

表３　出土遺物観察表（３）

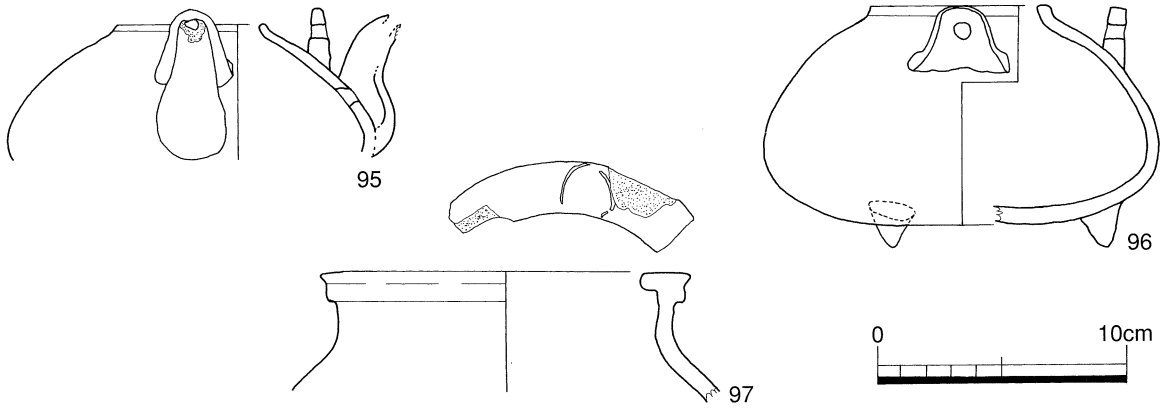
遺物No.	写真図版	出土地	種別	器種	法量（cm）			残存率	生産地　時期　胎土　その他
					口径	底径	器高		
27	10	SC14	磁器	染付小碗	(9.4)	(4.4)	4.8	1/5	肥前系　19c初頭～幕末　蝶＋？
28	－	SC14	磁器	白磁小杯	5.0	3.2	3.7	1/2	肥前系　18c後半～19c初頭　畳付無釉
29	10	SC14	磁器	染付小杯	(6.8)	2.0	3.7	1/5	肥前系　18c後半～19c初頭　畳付無釉
30	－	SC14	磁器	－	(8.8)	－	－	口縁部1/5	瀬戸美濃系？　19c～　鉄釉
31	11	SC14	陶器	小碗	(8.8)	(4.0)	4.4	1/5	肥前系　18c前半　胎土は精良で浅黄橙色
32	－	SC14	陶器	鉢	(33.6)	－	－	口縁部1/6	薩摩（苗代川）　18c　オリーブ黒色（鉄釉）　赤色（胎土）
33	11	SC14	陶器	鉢	(16.4)	14.8	11.4	1/4	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（鉄釉）　明赤褐色（胎土）
34	－	SC14	陶器	鉢	－	15.8	－	1/3	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（鉄釉）　明赤褐色（胎土）
35	11	SC14	陶器	擂鉢	－	13.8	－	底部1/6	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（鉄釉）　明赤褐色（胎土）
36	－	SC14	陶器		(6.2)	－	－	口縁部1/6	北部九州？　17c代　暗褐色（鉄釉）　褐灰色（胎土）
37	11	SC14	陶器	瓶	－	－	－	頸部1/5	福岡？　18c代　頸部は暗赤褐色（鉄釉）　頸部下は黄褐色（灰釉）
38	11	SC14	陶器	土瓶	(4.8)	－	－	底部と体部1/3を欠く	薩摩　18c代　極暗赤褐色（鉄釉）　褐灰色（胎土）
39	11	SC14	陶器	壷	(8.2)	－	－	口縁部から体部にかけて1/6	薩摩（苗代川）　17c後半～18c　暗灰黄色（鉄釉）　オリーブ黒色（胎土）
40	11	SC14	陶器	甕	29.6	－	－	口縁部1/10	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（釉）　赤褐色（胎土）　貝目？

SC：土坑

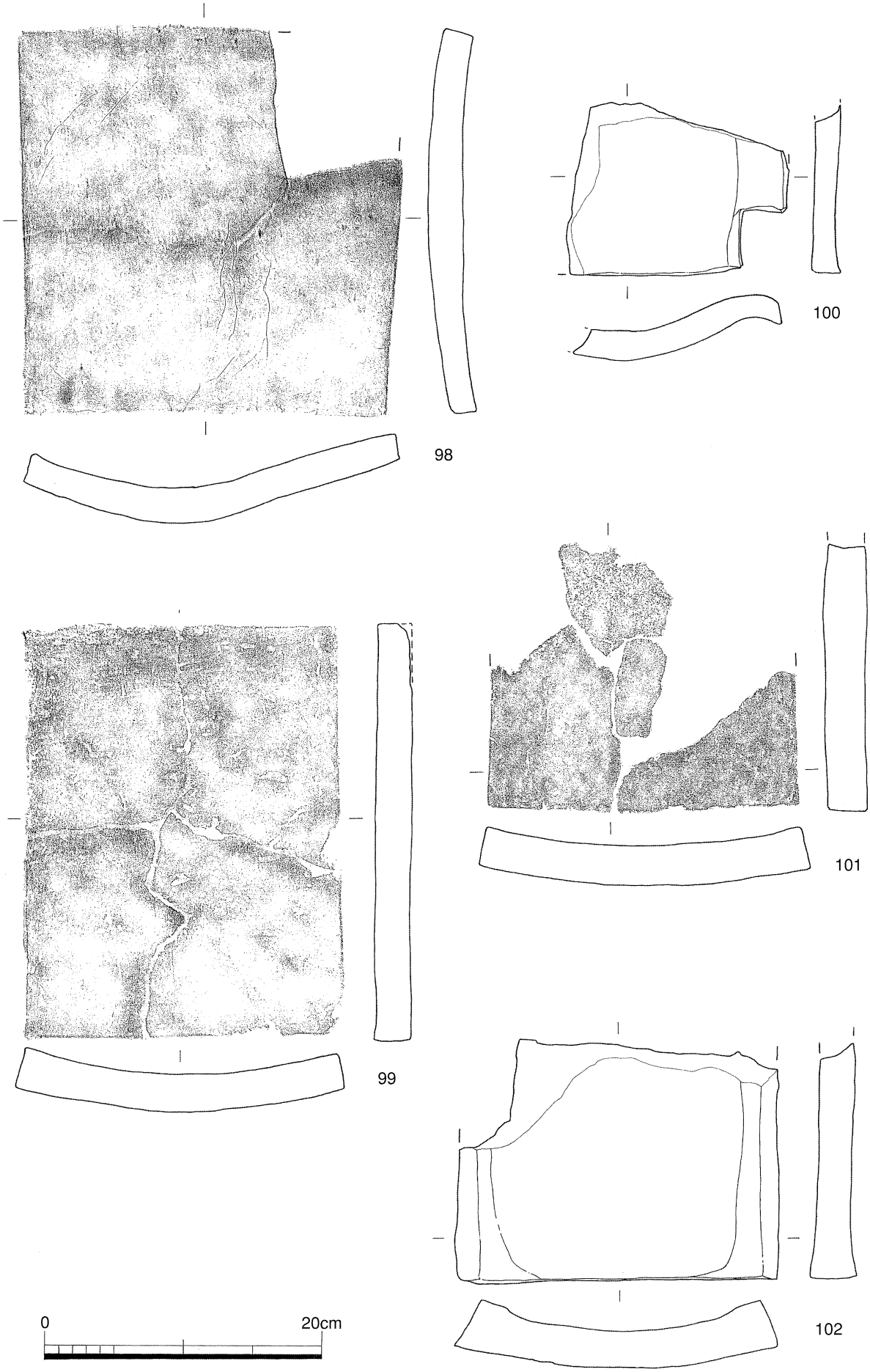
形で、大きく屈曲する注口は体部中央に付く。注口内の茶止穴は３箇所設けられている。口縁部内面と口唇部は施釉しない。38と39は、苗代川の製品かどうかは不明である。40は苗代川の甕で、頸部に沈線を巡らし、さらに頸部下に断面三角突帯を２本巡らす。その他の遺物としては、硯や土製人形がある。41は硯で一部欠損している。長さ11.2cm以上、幅5.3cm、高さ1.1cm以上である。土製人形は猿顔を模した素焼きのもの等で、器壁が薄く内面が黒褐色を呈する。また、２次的な資料ではあるが、瀬戸美濃系緑釉の碗皿類（17ｃ～18ｃ）や薩摩の灰釉（18ｃ代）が出土している。また、肥前系の染付鱠皿（17c）や陶器大皿（17c後半）も出土している。

15号土坑（第10図）　この土坑は調査区西側で検出された。プランは長軸約1.9m、短軸約1.5mの不定形な土坑である。床面は東側でやや深くなるものの平坦に近く、壁面は約0.5mの深さを約65度の傾斜で立ち上がる。

遺物は比較的密な状態で出土している。磁器は染付や色絵の碗、皿、鉢等が出土している。染付の碗であるが、45は腰の部分から口縁部にかけて直線的に開く碗である。内面縁文は四方襷文を巡らす。46は伝世品である。48は外面を畳付以外はすべて瑠璃釉が施される。内面は見込みに松竹梅が描かれる。



第16図　15号土坑出土遺物実測図（5）（1/3）



第17図　15号土坑出土遺物実測図（6）（1/4）

その他には、氷裂花文や山水文を施したものが出土しており、内面縁文に四方襷文を巡らすものが比較的多い。丸碗の出土は確認できるが、広東碗は認められない。小杯は白磁のものが多い。52は景徳鎮のヨーロッパ等への輸出用製品で、受け皿が付くタイプである。器形は端反口縁を成し、外面は畳付辺りまで褐釉を施す。皿は区別できるもので８点出土した。見込みが残るものは、そのほとんどに五弁花文を印していた。56は畳付無釉で口縁部は口紅をなす59は伝世品で、底部外面（高台内）に放射状の削りを残している。鉢は62と63のみ出土した。64～66は猪口である。青磁染付も出土している。67は花瓶等の瓶類である。色絵の碗は小碗（69･70）が２点出土し、両方共18ｃ中～後半である。

陶器は碗、鉢、擂鉢、瓶、土瓶、甕等が出土した。碗は肥前系をはじめ、関西系や薩摩の製品が確認されている。71と74は肥前系で、71は武雄･塩田方面で生産された京焼き風の碗である。体部下位から高台にかけては施釉しない。74も高台は施釉しない。72は薩摩と思われる。見込みは蛇の目釉剥ぎである。73は瀬戸美濃系で、体部はケズリ成形をなす。76～81は鉢である。76は片口が付くタイプのものと思われる。77～80は苗代川の製品に類似している。81は素焼きの鉢である。口唇部や口縁端部に連続刺突文を施す。82～86は擂鉢である。82と83は関西方面のものである。84～86は苗代川で、外面に横方向の刷毛目状の調整痕を残す。擂鉢86は内面全釉である。87は色絵で型押成形による。格子文様は鳥籠を表すものと思われ、欠損部分には鳥を模したものが付いていたと推定される。89～93は土瓶等の蓋である。92は白薩摩の可能性がある。90と93は生産地が不明である。94～96は土瓶である。94と96は注口が欠損している。95は、注口内の茶止穴が３箇所設けられている。口縁部内面と口唇部は施釉しない。96は脚部付近まで施釉する。97の甕は、口縁部に貝目が確認できる。

瓦は、丸瓦の出土も若干見られるが、そのほとんどは平瓦である。98は、長さ27.7㎝、幅27.2㎝で一部欠損している。上面は丁寧なナデ調整で、下面は粗く仕上げている。上面角を面取りしている。99は、長さ30.0㎝、幅23.8㎝、重量約2,600ｇで完形である。上面は丁寧なナデ調整で、下面は粗く仕上げている。この瓦の色調は、1/3程度が黒く燻した状態になっているが、それ以外は灰白色を呈する。上面角を小さく面取りしている。100も上面は丁寧なナデ調整で、下面は粗く仕上げている。101は、長さ19.1㎝以上、幅24.8㎝で大きく欠損している。色調は全体的に灰白色であるが、下面は淡い橙色を呈するところがある。上面角を小さく面取りしている。102は、長さ17.0㎝以上、幅28.2㎝で、片面両側に稜をつくる。上面は磨いたように丁寧な調整である。

この遺構からは、陶磁器類からみると18世紀後半から19世紀前半の遺物を中心に出土しているが、瓦を見る限りにおいては、この遺構の時期がそれより下る可能性がある。

４　整地層

この整地層は調査区の南端で確認された。西側に深く約0.5m以上となるが東側になだらかに浅くなる。比較的最近（戦後期）に周りの土砂を削平して、その土砂で窪地を埋めたものと思われる。整地層は２つに分層できるが、時期差はほとんど無いものと考えられる。

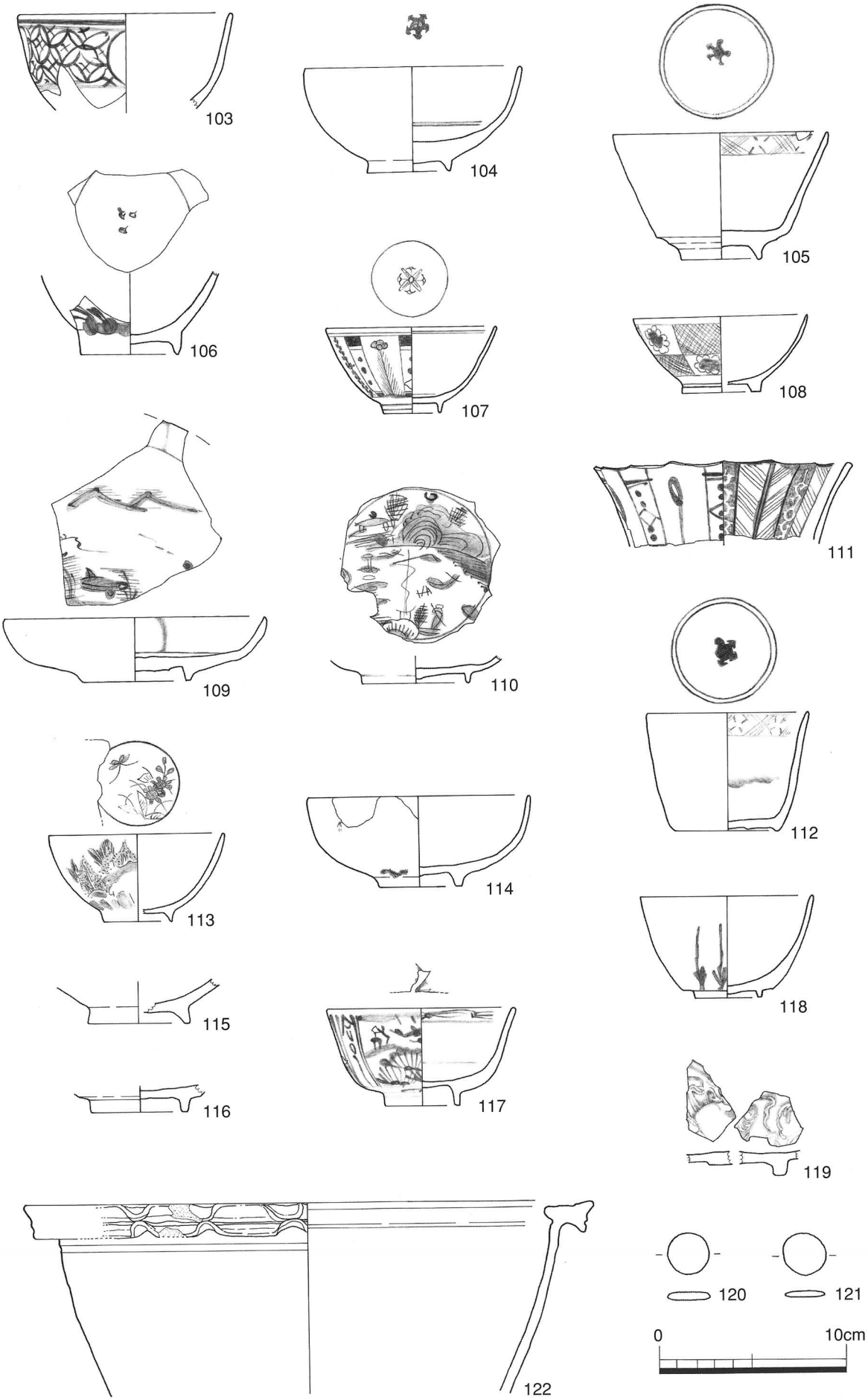
出土遺物は、新しいものも若干含まれるが、そのほとんどは17世紀～19世紀前半に含まれるもので、この調査地の時期にも該当する。

まず、磁器は碗、皿、鉢、猪口、瓶等が出土した。碗は103～108、117で、117以外は肥前系である。106のような19世紀代の広東碗の他に反端碗が、少量ではあるが出土している。117は瀬戸美濃

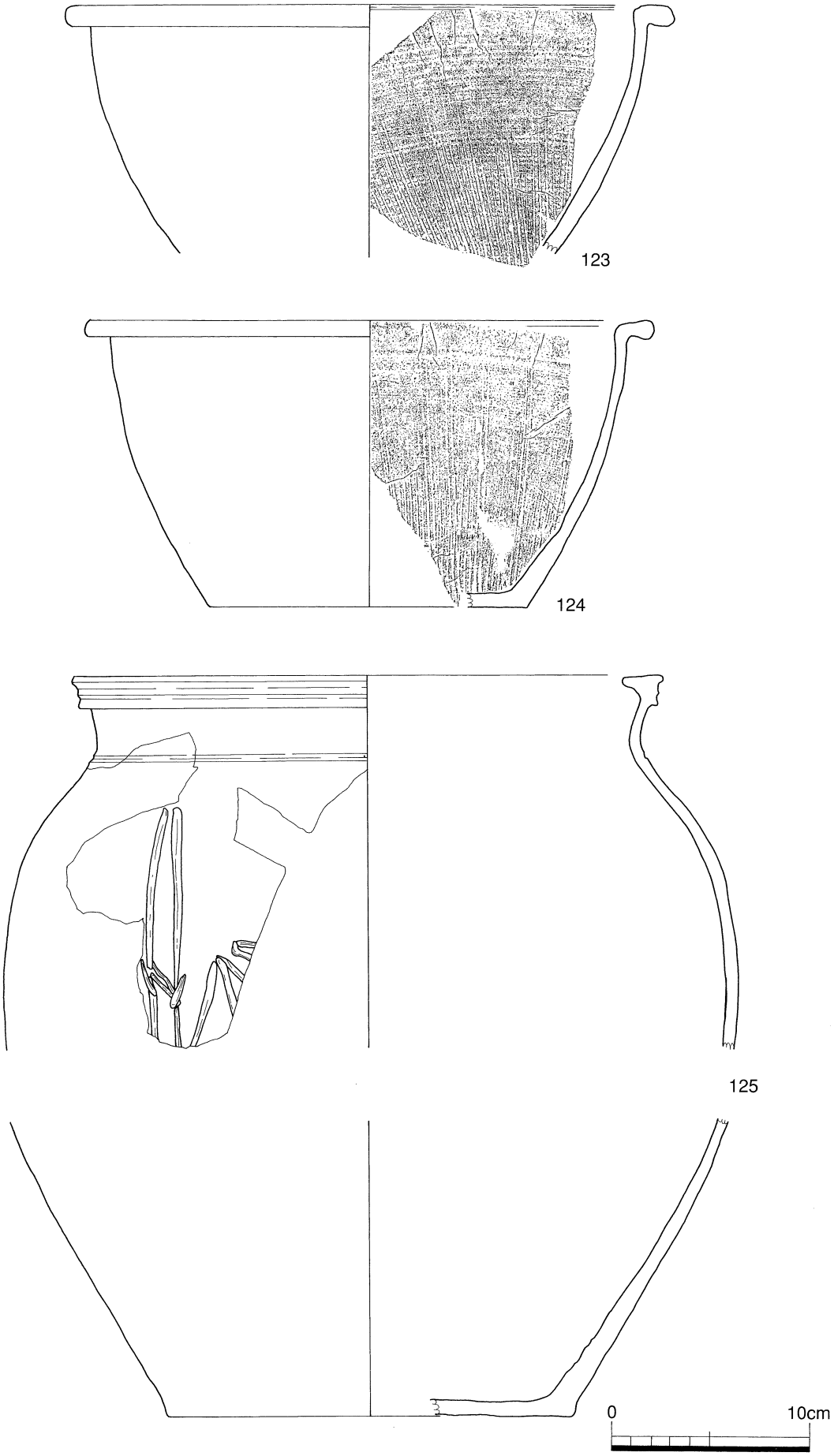
表４　出土遺物観察表（４）

遺物No.	写真図版	出土地	種別	器種	法量（cm）			残存率	生産地　時期　胎土　その他
					口径	底径	器高		
42	12	SC15	磁器	白磁碗	(12.6)	(5.4)	5.4	2/5	肥前系　18c後半～19c初頭　見込み部分は蛇の目釉剥ぎ　畳付無釉
43	12	SC15	磁器	染付碗	10.0	4.0	4.9	口縁部1/8欠損	肥前系　18c前半～中葉　裂文
44	12	SC15	磁器	染付碗	－	4.4	－	底部のみ	肥前系　1730～1750年　草花文
45	12	SC15	磁器	染付碗	(10.0)	－	－	口縁部から体部1/3	肥前系　1730～1750年　草花文　四方襷文
46	12	SC15	磁器	青花碗	16.4	5.8	5.1	口縁部1/3欠損	景徳鎮　16c前葉～中葉　草花文
47	12	SC15	磁器	染付碗	(12.0)	－	－	口縁部1/5	肥前系　1760～1780年　四方襷文（内面）
48	12	SC15	磁器	瑠璃釉染付碗	11.4	4.6	6.1	完形	肥前系　1760～1800年　松竹梅文　四方襷文
49	13	SC15	磁器	染付碗	10.4	3.6	5.3	7/8	肥前系　1780～1810年
50	13	SC15	磁器	染付小碗	9.4	3.2	5.0	完形	肥前系　1780～1810年　捻り文　焼成不良
51	－	SC15	磁器	小碗	7.8	2.8	4.1	2/3	肥前系　18c後半～19c初頭
52	13	SC15	磁器	褐釉染付小碗	7.4	3.6	3.9	3/4	景徳鎮系　18c前半（清朝）　褐釉（外面）　底裏銘「元」
53	13	SC15	磁器	白磁小杯？	5.2	3.2	3.4	完形	肥前系　18c後半
54	13	SC15	磁器	染付小杯	6.6	2.8	4.2	完形	肥前系　18c前半　畳付無釉
55	13	SC15	磁器	白磁?小杯	6.7	2.7	3.8	口縁部1/3欠損	肥前系　18c前半～中葉　焼成不良
56	13	SC15	磁器	染付小皿	13.0	6.9	3.0	完形	肥前系　18c後半　見込み五弁花　底裏銘「福」
57	13	SC15	磁器	染付小皿	13.0	7.2	3.9	1/2	肥前系　18c後半　見込み五弁花　底裏銘有り
58	13	SC15	磁器	染付小皿	(13.4)	(7.2)	3.7	1/2	肥前系　18c前半　見込み五弁花　底裏銘有り
59	14	SC15	磁器	青花皿	13.2	8.0	3.1	2/3	景徳鎮　1600～1630年　砂目？　底裏畳付付近に放射状のケズリ
60	14	SC15	磁器	染付蓋	12.8	－	3.5	2/3	肥前系　18c中葉　取手有り
61	14	SC15	磁器	染付蓋	(10.4)	－	2.7	口縁部7/8欠損	肥前系　1760～1780年　望料蓋
62	14	SC15	磁器	染付鉢？	－	－	－	口縁部	肥前系　1780～1820年
63	14	SC15	磁器	染付小鉢？	7.4	3.8	3.8	口縁部1/3欠損	肥前系　18c後半
64	14	SC15	磁器	染付猪口	(7.0)	(5.2)	6.3	1/2	肥前系　18c後半
65	14	SC15	磁器	染付猪口	(7.8)	(5.6)	5.9	2/5	肥前系　1750～1770年代　輪花　四方襷文（内面）
66	14	SC15	磁器	染付猪口	7.4	5.0	5.6	2/3	肥前系　18c後半　氷裂菊花文
67	－	SC15	磁器	青磁瓶	(8.8)	－	－	口縁部1/4	肥前系　18c代　花瓶か？
68	－	SC15	磁器	白磁手塩皿	5.2	3.0	1.4	完形	肥前系　１８c代　ミニチュア
69	14	SC15	磁器	色絵小碗	(8.0)	3.0	3.8	1/8	肥前系　18c中葉～後半　桜花流水文
70	15	SC15	磁器	色絵小碗	8.3	2.9	4.2	口縁部から体部にかけて5/6欠損	肥前系　18c中葉～後半
71	15	SC15	陶器	碗	－	3.4	－	底部のみ	肥前系　18c前半　京焼風　高台付近は無釉
72	15	SC15	陶器	碗	(12.6)	5.4	5.7	口縁部2/3欠損	薩摩　18c～19c初め　灰色（釉）　褐灰色（胎土）
73	15	SC15	陶器	灰釉碗	－	7.8	－	口縁部欠損	瀬戸美濃系　18c　体部下半～底部は無釉
74	15	SC15	陶器	鉄絵碗	(9.6)	3.8	5.3	口縁部から体部にかけて5/6欠損	肥前系　18c前半　にぶい褐色（釉）　にぶい橙色（釉）　高台付近は無釉
75	15	SC15	陶器	小碗	(8.4)	2.6	5.3	1/3	関西系　18c後半～19c初頭　高台付近は無釉
76	16	SC15	陶器	片口鉢	－	－	－	－	肥前系　18c　刷毛目
77	16	SC15	陶器	鉢	(29.8)	－	－	口縁部1/6	薩摩（苗代川）　18c　オリーブ黒色（鉄釉）　褐灰色（胎土）
78	16	SC15	陶器	鉢	(26.6)	16.4	8.2	1/8	薩摩（苗代川）　18c　黒褐色（鉄釉）　赤褐色（胎土）　貝目?
79	16	SC15	陶器	鉢	(29.2)	19.6	10.2	1/5	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
80	16	SC15	陶器	鉢	(25.2)	－	－	1/10	薩摩（苗代川）　胴部下半両面無釉
81	16	SC15	土師器	鉢	24.8	－	－	1/6	口唇部と口縁上面に連続刺突文
82	16	SC15	陶器	擂鉢	－	－	(15.4)	－	丹波？　17c～18c　口縁部内側に沈線を巡らす。
83	17	SC15	陶器	擂鉢	－	－	－	－	堺　18c　外面はにぶい赤褐色、内面は灰赤色
84	17	SC15	陶器	擂鉢	－	－	－	－	薩摩（苗代川）　18c後半～19c前半？　外面は灰白色、内面は暗赤褐色（鉄釉）
85	17	SC15	陶器	擂鉢	－	－	－	－	薩摩（苗代川）　18c後半～19c前半？　外側は灰オリーブ色、内面は暗赤褐色（鉄釉）赤褐色（胎土）
86	17	SC15	陶器	擂鉢	(32.6)	(18.8)	15.6	1/6	薩摩（苗代川）　18c　オリーブ黒色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
87	17	SC15	陶器	色絵瓶	－	4.6	－	体部1/2と口縁部欠損	肥前系　18c　水滴　格子文様は鳥かごを表す　底部内面布目
88	17	SC15	陶器	水注?	(7.8)	－	－	1/10	関西系　18c後半～19c前半　暗赤褐色（鉄釉）　灰白色（胎土）
89	17	SC15	陶器	土瓶蓋	(13.4)	－	－	口縁部1/3	薩摩（苗代川）　暗褐色（鉄釉）　にぶい赤褐色（胎土）
90	18	SC15	陶器	土瓶蓋	5.4	－	3.1	完形	在地？　江戸後期　暗赤褐色（鉄釉）　褐灰色（胎土）
91	18	SC15	陶器	土瓶蓋	9.0	－	3.3	ほぼ完形	薩摩（苗代川）　黒褐色（鉄釉）　暗赤色（胎土）
92	18	SC15	陶器	土瓶蓋	5.2	－	3.5	完形	薩摩（白薩摩?）　19c
93	18	SC15	陶器	土瓶蓋	7.8	－	3.0	完形	在地？　江戸後期　黒色（鉄釉）　極暗赤褐色（胎土）
94	18	SC15	陶器	土瓶	(6.6)	－	－	1/8	薩摩（白薩摩）　18c　口縁部内面から口唇部にかけて無釉
95	18	SC15	陶器	土瓶	5.8	－	－	1/6	薩摩　黒褐色（鉄釉）　灰白色（胎土）
96	18	SC15	陶器	土瓶	7.0	－	－	1/2注ぎ口欠損	薩摩　暗赤褐色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
97	19	SC15	陶器	甕	14.6	－	－	1/4	薩摩　17c前半　貝目

SC：土坑



第18図　整地層出土遺物実測図（1）（1/3）



第19図　整地層出土遺物実測図（2）（1/3）

表５　出土遺物観察表（５）

遺物No.	写真図版	出土地	種別	器種	法量（cm）			残存率	生産地　時期　胎土　その他
					口径	底径	器高		
103	－	整地層	磁器	染付碗	(11.2)	－	－	1/4	肥前系　1610～1640年
104	19	整地層	磁器	青磁染付碗	11.4	4.4	5.5	口縁部1/8欠損	肥前系　18ｃ代　見込み五弁花
105	19	整地層	磁器	青磁染付碗	11.2	4.2	6.7	3/4	肥前系　18ｃ代　見込み五弁花
106	19	整地層	磁器	染付碗	-	5.0	－	底部のみ	肥前系　19ｃ前半　広東形碗
107	19	整地層	磁器	染付小碗	(9.0)	3.0	4.5	1/3	肥前系　1770～1800年
108	19	整地層	磁器	染付小碗	9.2	(4.2)	4.0	1/2	肥前系　1770～1810年
109	20	整地層	磁器	染付小皿	(13.8)	5.6	3.4	口縁部1/20と底部	肥前系　1630～1640年　輪花皿？　口紅
110	20	整地層	磁器	青花皿	－	5.8	－	底部のみ	璋州窯系　1590～1630年　山水人物文
111	－	整地層	磁器	染付鉢	(13.8)	－	－	1/4	肥前系　1800～1860年
112	20	整地層	磁器	青磁染付猪口	11.4	5.6	6.2	口縁部1/3欠損	肥前系　18ｃ後半～　蛇の目凹形高台　見込み五弁花　二次焼成？
113	20	整地層	磁器	色絵小碗	9.3	3.5	4.6	1/7欠損	肥前系（有田ではない）　18ｃ中～後半
114	20	整地層	陶器	碗	(11.6)	4.4	4.8	口縁部2/3欠損	薩摩（白薩摩）　千鳥印
115	－	整地層	陶器	碗	－	(5.4)	－	底部1/2	肥前（内野山）　1610～１７ｃ前半　白色（胎土）
116	－	整地層	陶器	碗？	－	(5.0)	－	底部1/4	瀬戸美濃系　17ｃ代　暗緑色（釉）　灰白色（胎土）
117	20	整地層	磁器	染付碗	(10.0)	(3.8)	5.2	1/2	瀬戸美濃系　1820～1860年
118	21	整地層	陶器	染付小碗	9.2	3.5	5.4	口縁部1/4欠損	関西系　18ｃ後半　底面無釉
119	20	整地層	陶器	皿	－	－	－	－	関西系　18ｃ　軟質施釉陶器
122	21	整地層	陶器	鉢	(30.0)	－	－	口縁部1/8	薩摩（苗代川）　黄灰色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
123	21	整地層	陶器	擂鉢	30.0	－	－	1/10	薩摩（苗代川）　19ｃ　暗オリーブ色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
124	21	整地層	陶器	擂鉢	(28.8)	(15.8)	14.4	1/6	薩摩（苗代川）　18ｃ後半～19ｃ前半　黒褐色（鉄釉）　赤褐色（胎土）
125	21	整地層	陶器	甕	(25.6)	(19.8)	－	1/3	薩摩（苗代川）　オリーブ黒色（鉄釉）　灰褐色（胎土）

系の磁器である。また、皿かも知れないが璋州窯系（17c初頭）のものも出土している。109と110は皿である。110は璋州窯系のもので皿類も肥前系（波佐見系のが目立つ）が多く、染付草花文の大皿や、見込み五弁花文を印した皿が出土している。猪口では、112の他にやや小ぶりの白磁製のものや薄瑠璃釉のもの（17c後半～18c前半）が出土している。113は色絵であるが、有田産ではなく塩田方面の製品と思われる。また、幕末以降ではあるが、瀬戸美濃系の色絵碗蓋が出土している。

陶器は、碗、皿、鉢、擂鉢、土瓶、壷、甕、化粧用具等が出土した。碗は115のように内野山のものや鉄絵陶器碗（1590～1610年）など肥前の初期のものや関西系の京焼き風陶器（17c後半～18c前半）や幕末以降の瀬戸美濃製の碗等が出土している。114のような唐千鳥を印した白薩摩も出土している。119は小片のため、器種が皿かどうかは判断しずらいが、四国の源内焼に類似している。また、肥前の台付き皿（17c後半～18c前半）も出土している。鉢は122のように薩摩製で鉄釉を施すものや肥前系の片口のものが出土している。擂鉢は、123や124の薩摩（苗代川）の製品だけではなく、肥前系（17c第２四半期）や堺の製品も出土している。125は外面に掻き落としで文様を描く甕で、苗代川系のものにみられる。土瓶は、薩摩の製品を中心に出土している。化粧用具としては、瀬戸美濃系の鬢盥（18c前半）が出土している。壷は福岡方面や沖縄方面の製品が出土している。

その他の出土遺物としては、120と121は黒色の碁石である。何れも径2.2cmほどである。瓦は数点出土している。また、銅銭、鉄釘、軽石製品等も確認された。

Ⅲ　総　括

弥生時代～中世

弥生時代は、包含層から後期の二重口縁ツボ（波状文）が１点出土している。古墳時代も、包含層から土師器の甕や鉢類が出土している。第５地点においても、古墳時代中葉の竪穴住居跡が確認されており、この集落遺跡の一連のものと推定する。古代についても包含層から回転台土師器の杯や高台付椀（杯）を中心に出土しており、９c代と推定する。この時期の遺物は、22地点（未報告）でも確認されており、蕨野遺跡（高岡町）出土遺物に似ているものもある。

中世の遺物は、土師器杯や小皿を中心に出土し、輸入陶磁器である青磁や白磁が若干見られる。土師器杯・小皿のほとんどはヘラ切り底であり、中世前半に集中しているようであるが、青磁類では、後半の遺物も若干見られる。遺構では、１号溝状遺構やピット群等がこの時期に該当すると思われる。

近世

この遺跡は鹿児島藩の高岡郷の政治的中心地であり、調査地はその一角を占める。この１２地点における近世の遺物は、古くは16c末からのものが出土しているが、多くは18c後半以降の遺物が目立つ。その中で肥前系、薩摩系など各生産地ごとに出土傾向が異なっている。本書で言う肥前系とは、有田、伊万里、唐津、波佐見やその周辺を含んだ総称である。

まず、肥前系の遺物は17c代から見ることが出来る。磁器の碗･皿が中心であるが、唐津の陶器碗も若干出土している。18c代になると遺物数が増加するが、19c代になると減少する。特に広東碗や反端碗の出土が少ない。波佐見産の碗･皿類が18c代から増加し、武雄等の有田周辺の製品も見ることが出来る。いずれにしても、大型品は少なく、碗･皿類が中心である。

薩摩系の遺物は、17c代ではほとんどと出土していない。18c代から目立ちはじめ、19c代にはピークとなる。磁器はほとんど確認されておらず、陶器が中心である。碗の出土は認められるが、鉢･甕類の出土が目立つ。鉢･甕類のほとんどは苗代川の製品である。南九州地域と推定される遺物も18c代以降から見られる。その中には在地産を想定するものも存在するが、在地の窯跡状況が未だに整理されておらず、流通等を考察するレベルには至っていない。

福岡･大分産の遺物は、陶器を中心に18c代から認められるが、数量は限られている。

関西系の遺物は、陶器の碗や袋物を中心に18c代から目立ち始めるが、量的には少ない。堺産や丹波産の擂鉢も出土している。

瀬戸美濃系の遺物は、17c代は定かでないが、18ｃ代から確認されている。陶器が中心だが、幕末には磁器も確認されている。何れも少量である。

輸入陶磁器類は、伝世品以外では、17c前後の青花皿の出土が認められる。

このような出土状況や、ピット等の遺構との兼ね合いを考慮すると、この調査地は17cの早い段階から高岡麓を形成する屋敷地として存在していたことがうかがわれ、少なくとも幕末までは存続していたものと推定される。第５地点においても屋敷地として17c代の遺物が確認されており、それに並ぶものとして、17c前半代の麓形成の在り方、さらには麓全体の形成過程を知る上で重要な位置付けができる。

今回調査した高岡麓は、鹿児島藩の去川関所の外側に置かれた郷（外城）の中心地である。そのよう

な条件下の郷とそれ以外の郷での比較検討は高岡麓や鹿児島藩全体を考える上で重要である。

県内における同時期の遺跡としては、八幡遺跡（都城市）がある。この遺跡における各生産地別の出土状況において、単純に比較した場合、同じ鹿児島藩内ではあるが異なった状況を示している。これについては、八幡遺跡は都城島津家の家老屋敷の調査であり、政治的条件や階級差を考慮する必要もあろう。しかし、地理的条件を含めた歴史的背景や藩内全体の政治体制等をも深く考察する必用がある。

参考文献

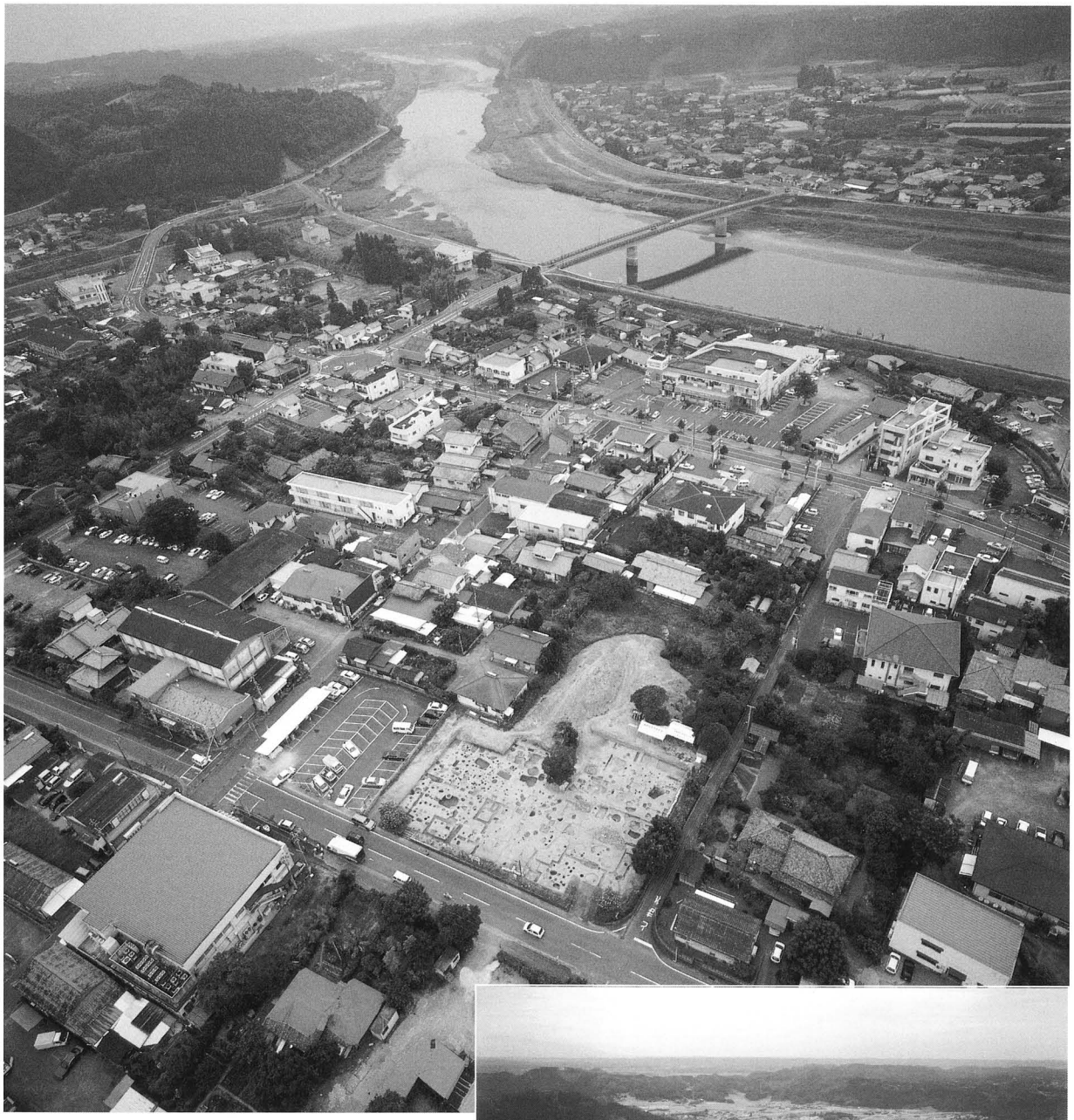
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003『雪山遺跡猿引遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）
鹿児島市教育委員会　2000『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡G地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（28）
加治木町教育委員会　1995『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財調査報告書１
加治木町教育委員会2001『弥勒窯跡』加治木町埋蔵文化財調査報告書３
加治木町教育委員会　2003『御里窯跡』加治木町埋蔵文化財調査報告書４
九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
桑畑光博　2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第19号　宮崎考古学会
佐賀県立九州陶磁文化館　1991『柴田コレクション（II）』
佐賀県立九州陶磁文化館　2002『柴田コレクション（VIII）』
佐賀県立九州陶磁文化館　1994『よみがえる江戸の華－くらしのなかのやきもの－』
世界・炎の博覧会波佐見町運営委員会　1996『波佐見青磁展・くらわんか展』
根津美術館　2002『知られざる唐津』
橋口　亘　2001「薩摩焼貝目・コマ目考（1）」『からから』No.9　鹿児島陶磁器研究会
都城市教育委員会　1997『田谷・尻枝遺跡』都城市文化財調査報告書第38集
宮崎県教育委員会　1996『高岡麓遺跡』
宮崎県埋蔵文化財センター　2003『八幡遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第70集
横田賢次郎　森田勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館
渡辺芳郎　2000「近世薩摩焼擂鉢考」『鹿児島考古』34号鹿児島県考古学会
渡辺芳郎　2000「貝目再考」『からから』No.８鹿児島陶磁器研究会

表６　報告書登録抄

フリガナ	タカオカフモトイセキ
書名	高岡麓遺跡（12地点）
副書名	産業再配置促進補助事業中央ふれあい広場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高岡町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編集者名	島田正浩
発行機関	高岡町教育委員会
所在地	宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887番地
発行年月日	2005年３月31日

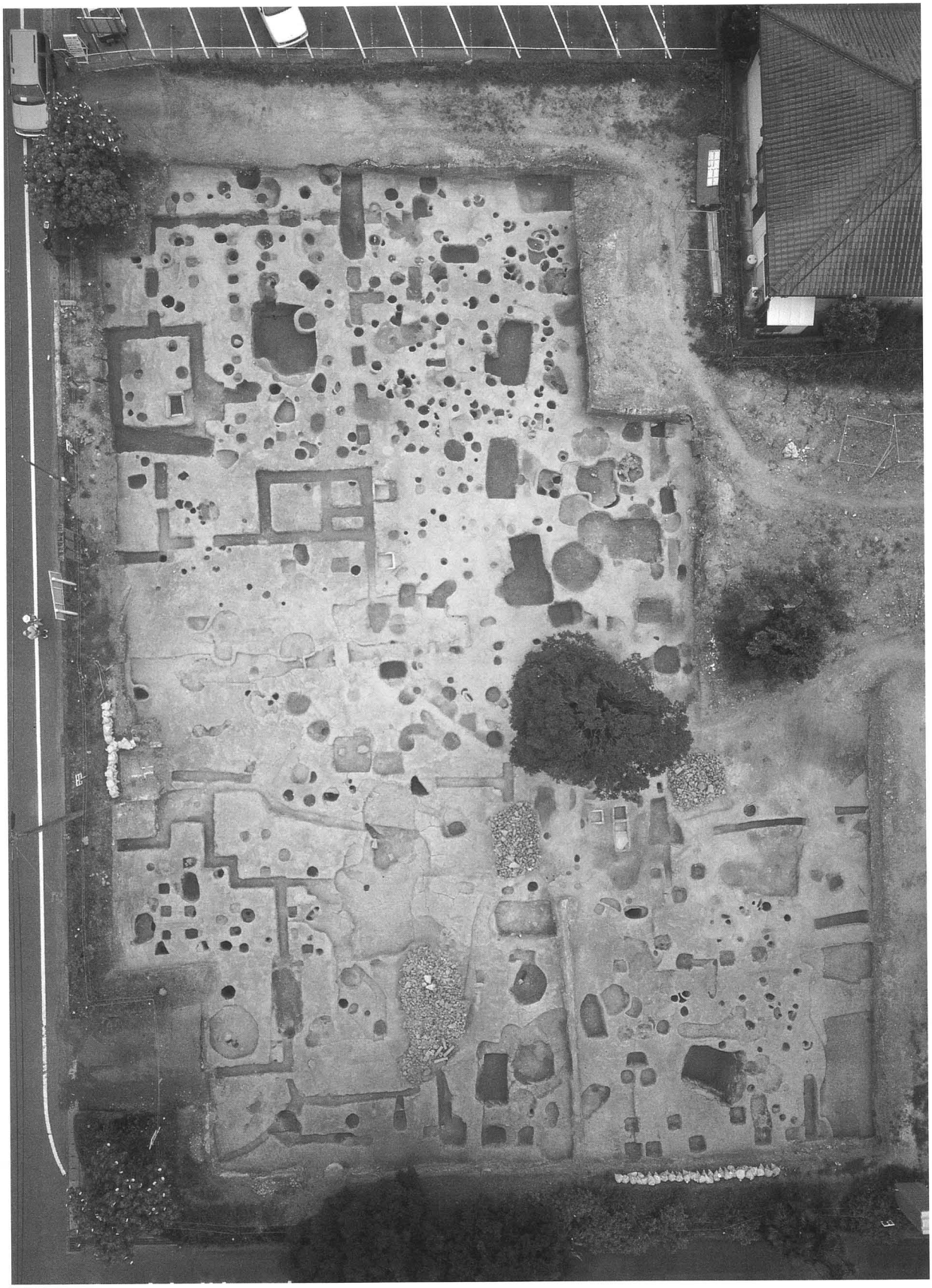
収蔵遺跡名	所在地	コード		緯度	経度	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高岡麓遺跡12地点	高岡町大字内山2865-1番地、大字五町265-1、265、266-2番地	45－381	406	31°57′11″	131°18′13″	H10.5.26～H10.7.31	1,220㎡	公園造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物				特記事項
散布地	弥生後期～近代	土坑 建物跡 溝状遺構		土師器皿　甕 青磁 青花（明代） 国産陶磁器（肥前・薩摩・福岡・瀬戸美濃・関西） 瓦（丸瓦、平瓦）、銅銭、碁石、鉄釘、獣骨製ブラシ				

写真図版



図版１　調査区遠景（上）
高岡麓遺跡遠景（右）

図版 2

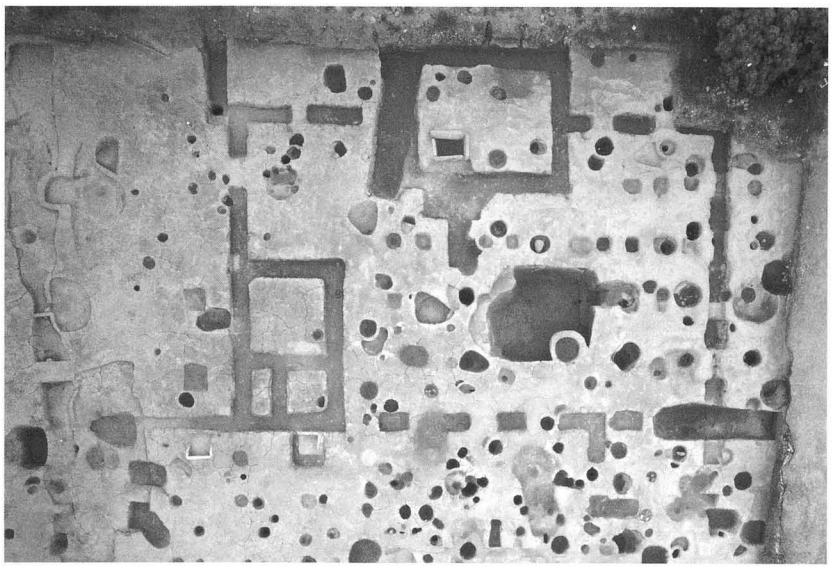


調査区全景

図版 3

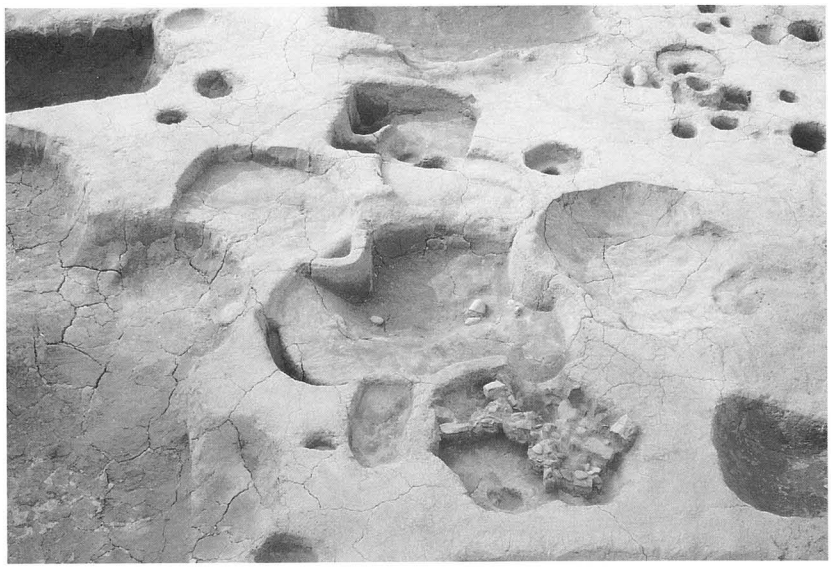
調査区全景

調査区東側



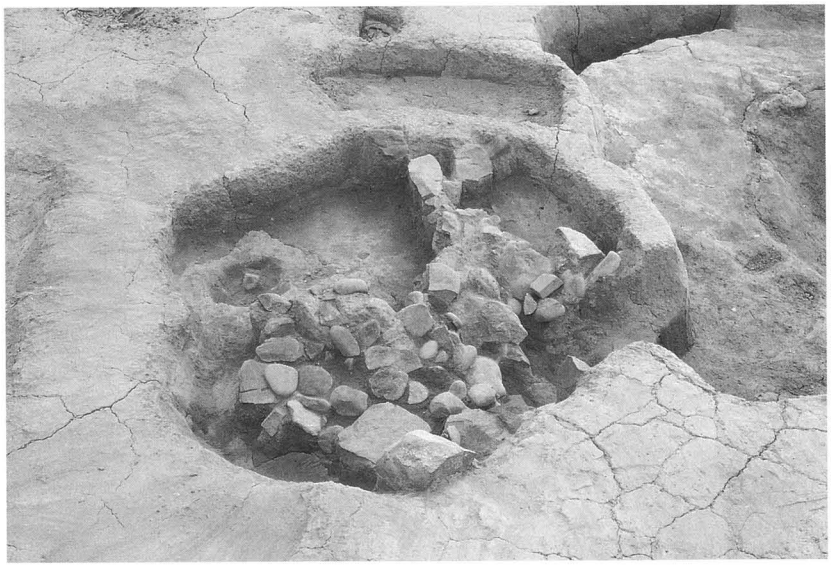
1号溝状遺構

図版 4



1・3～5号土坑

1号土坑



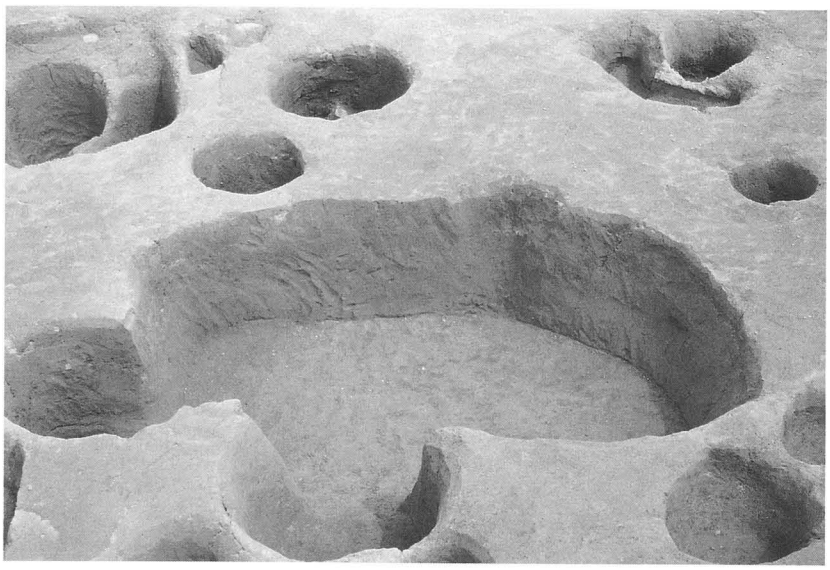
3号土坑

図版 5

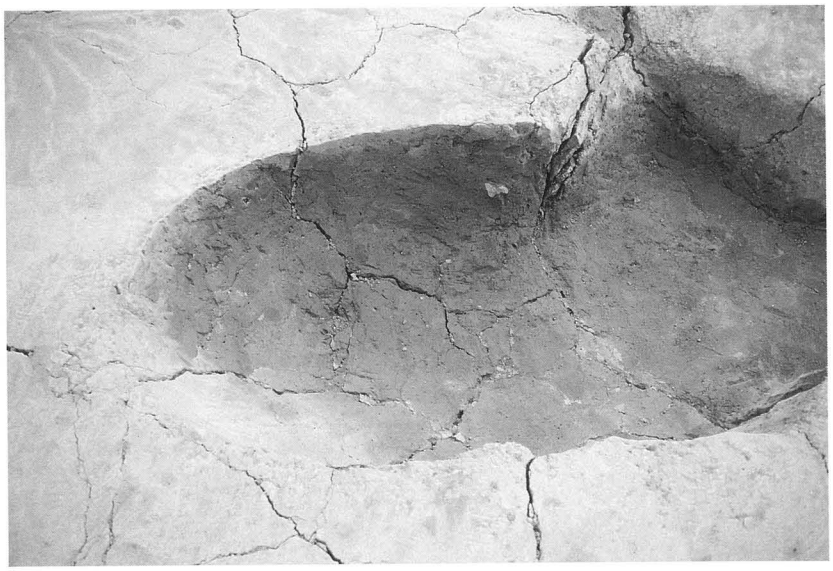
4 号土坑

5 号土坑

8 号土坑



図版 6



10号土坑

11号土坑

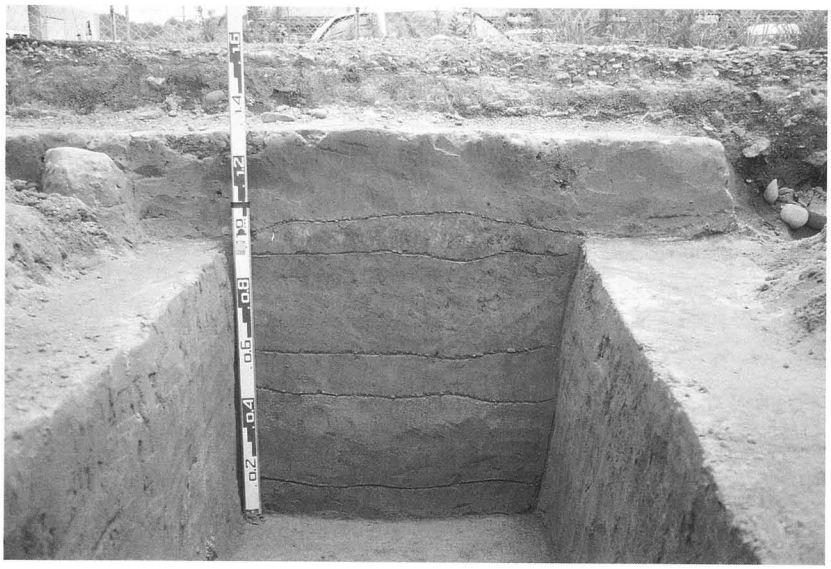
13号土坑

図版 7

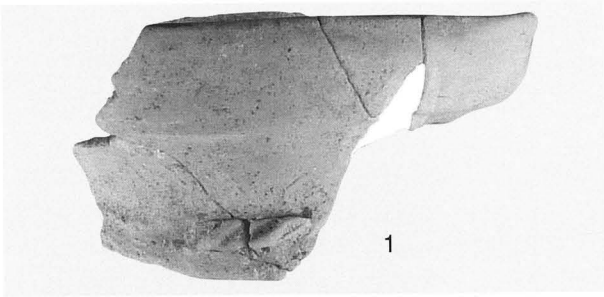
14号土坑

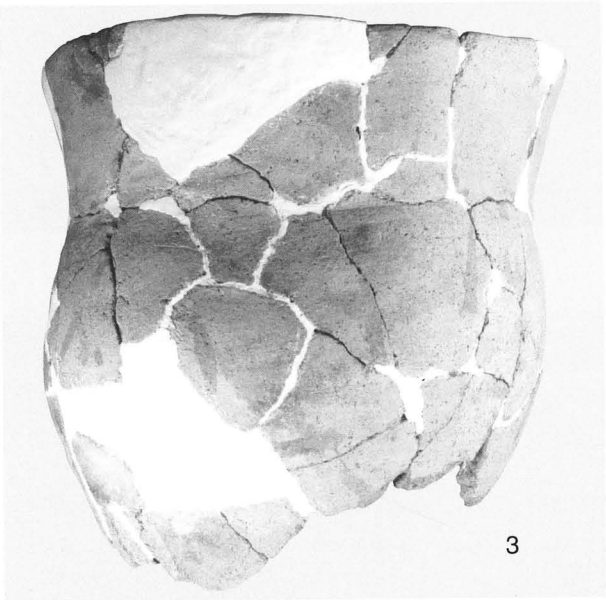
15号土坑

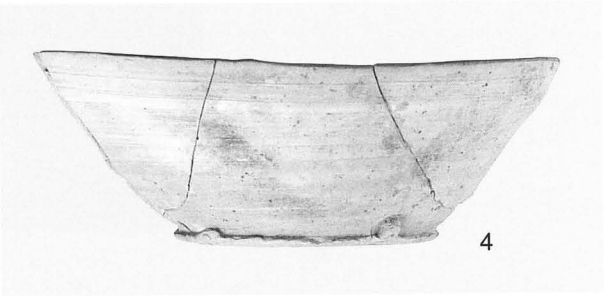
包含層堆積状況

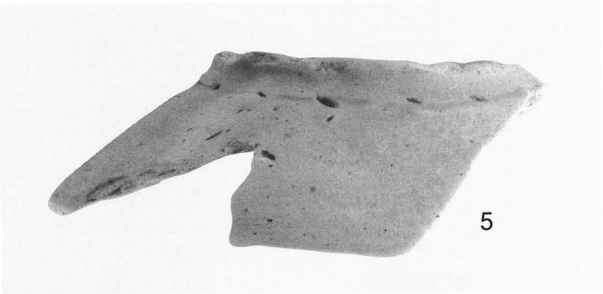


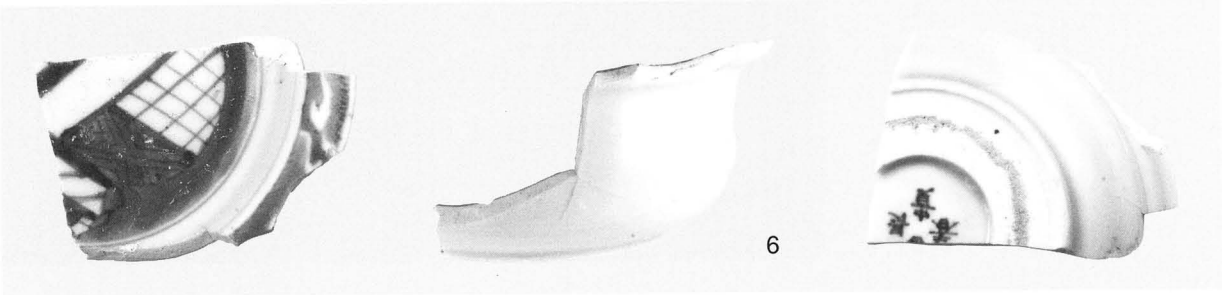
図版 8

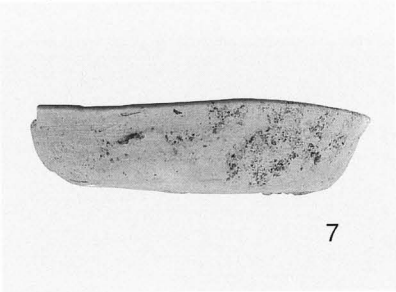


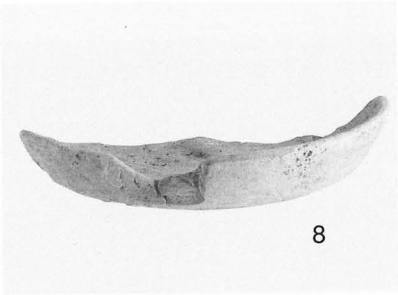


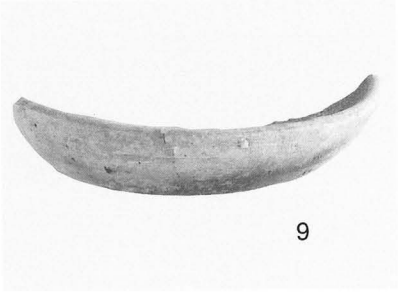


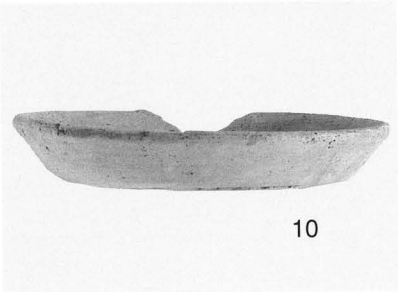




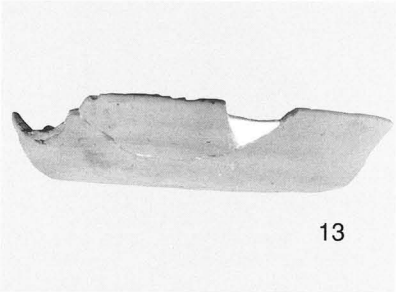




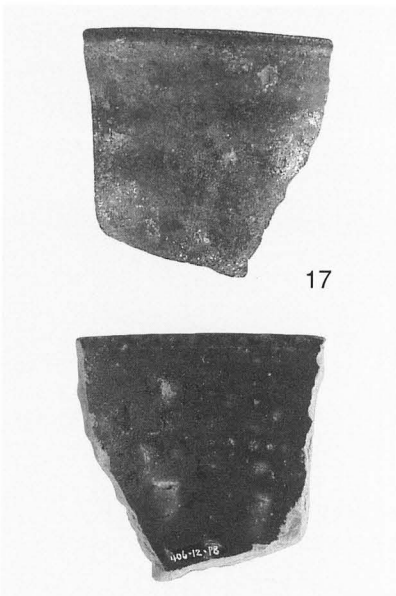




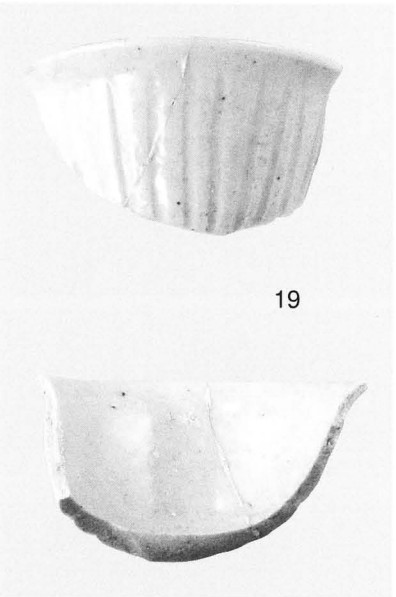
12

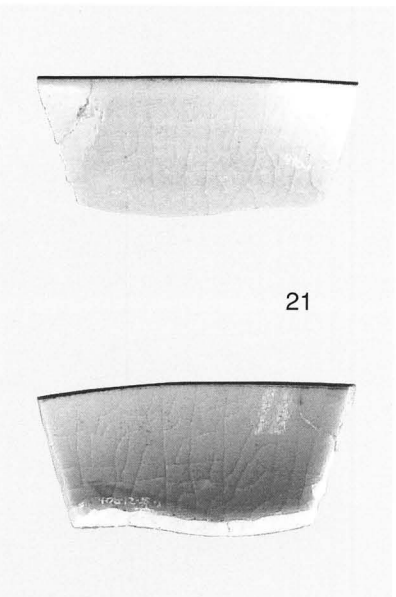

13

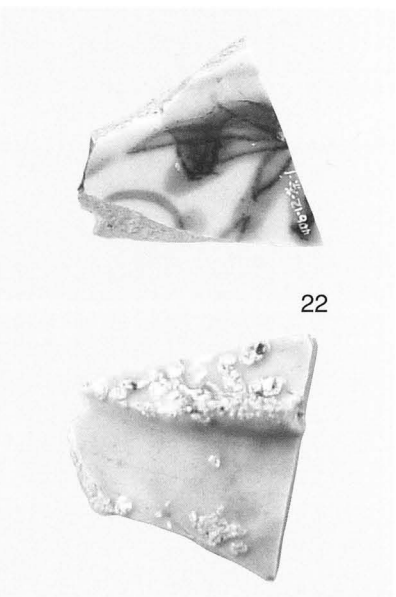
15

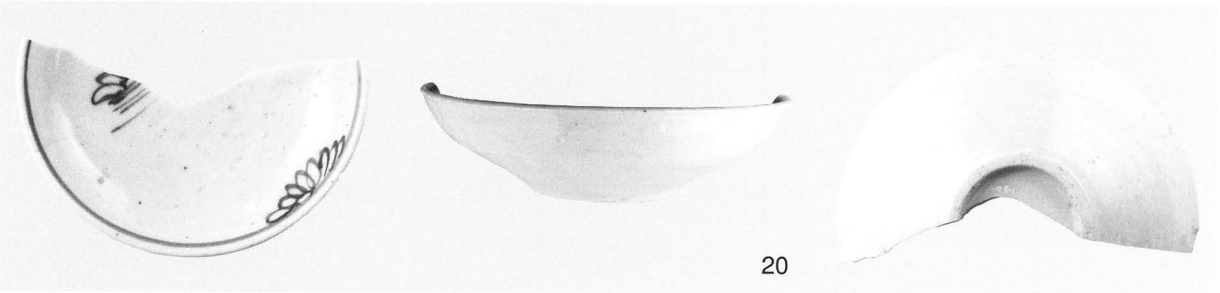

17

16

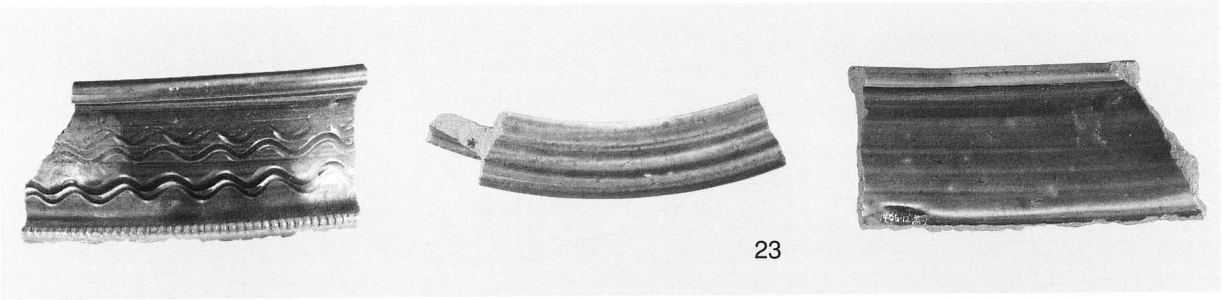

19

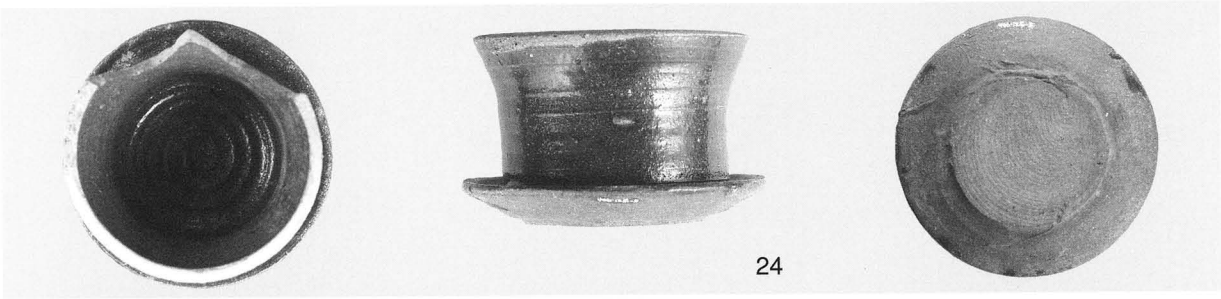

21

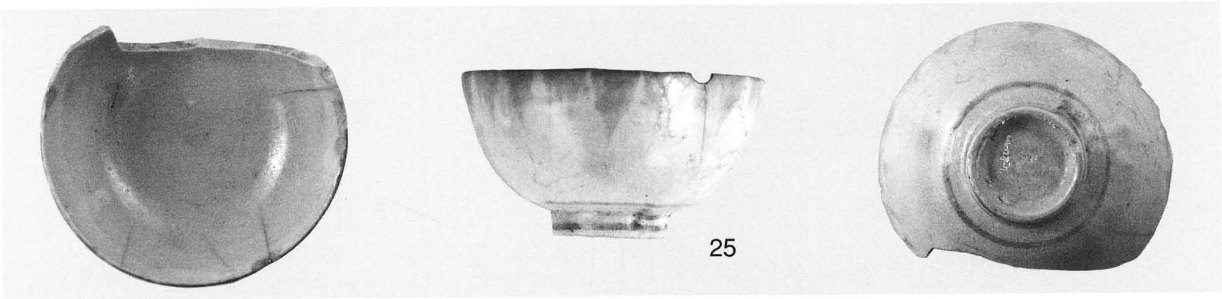

22

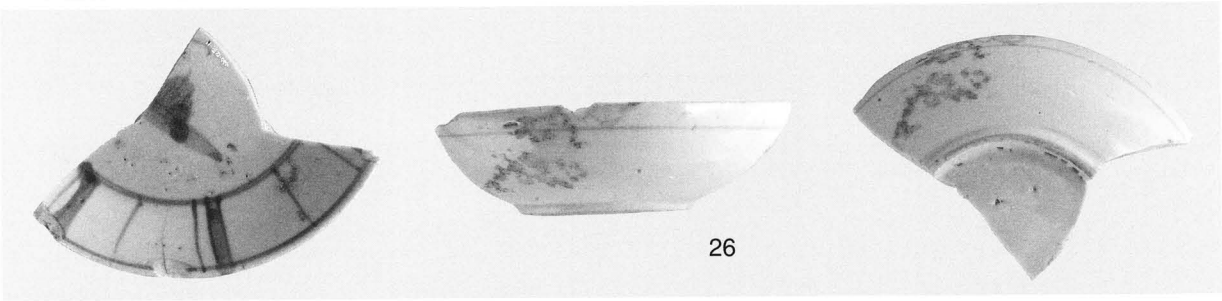

20

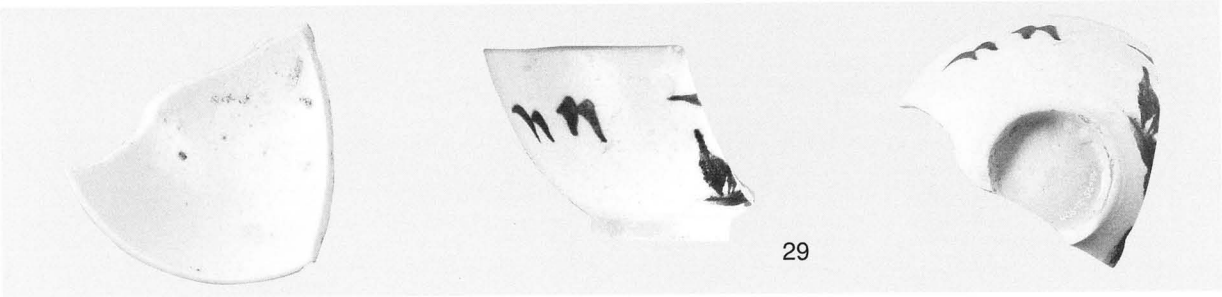
図版10

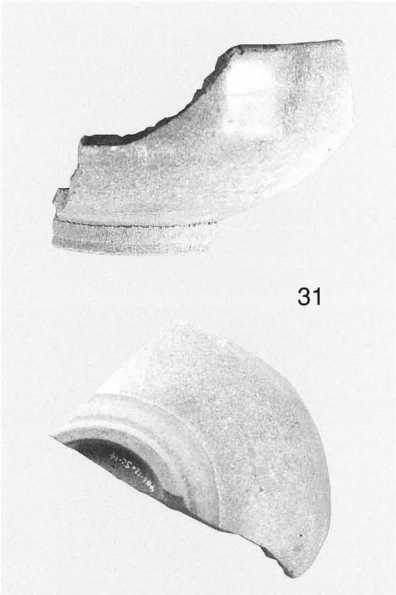


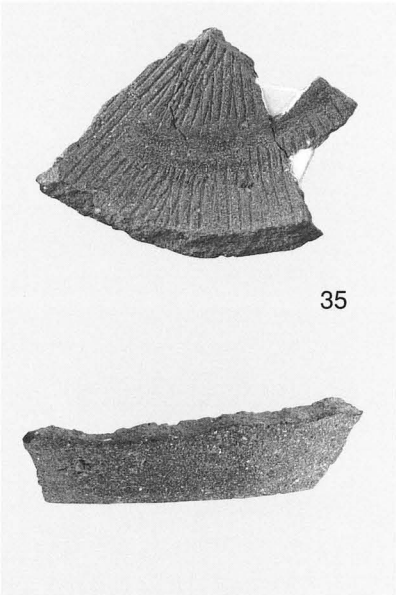


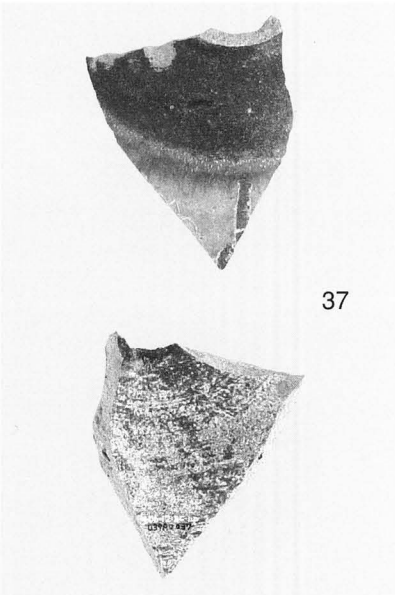






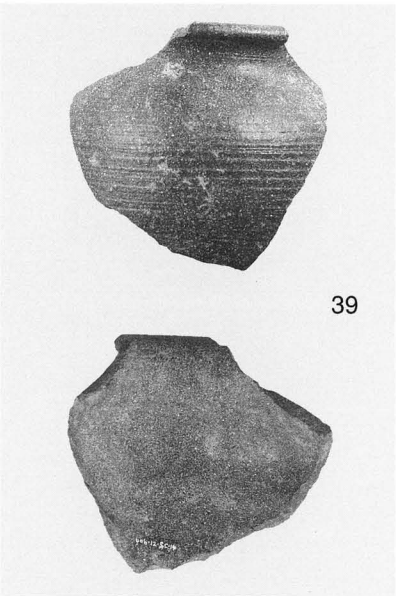

31

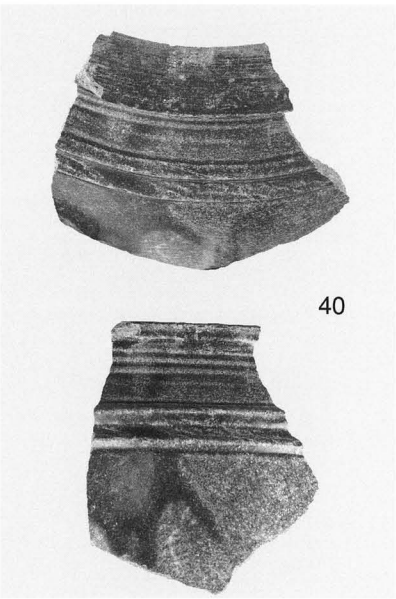

35

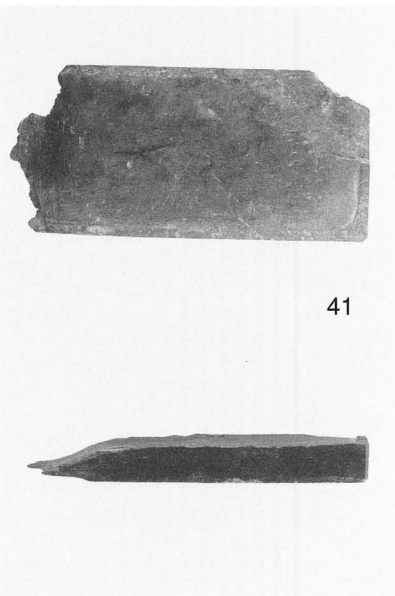

37

33

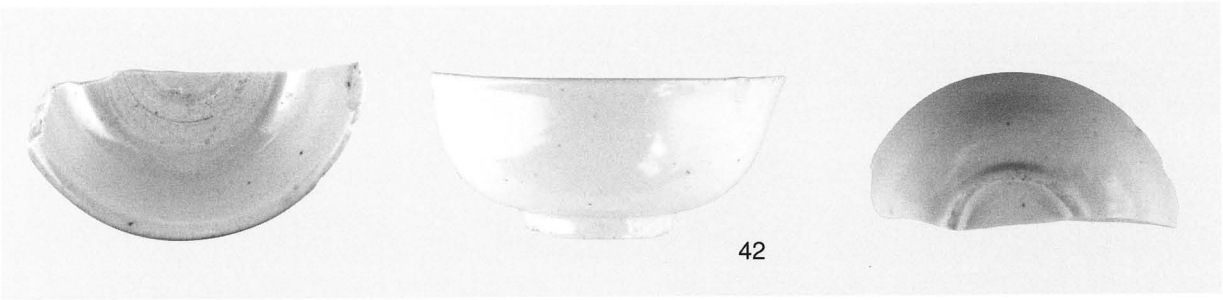
38

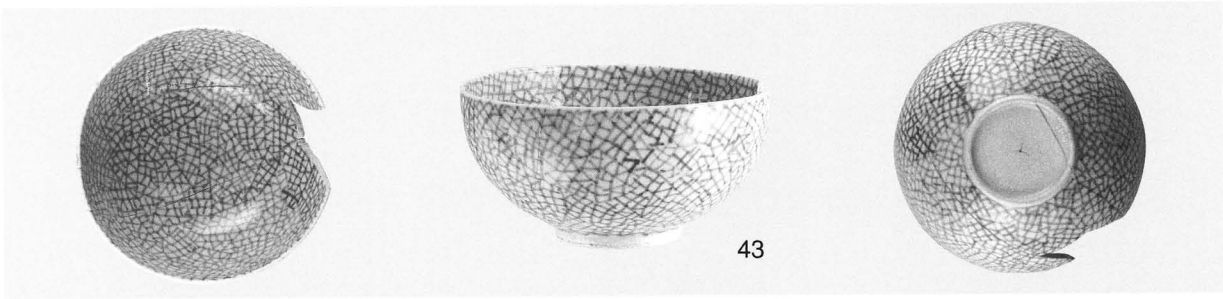

39

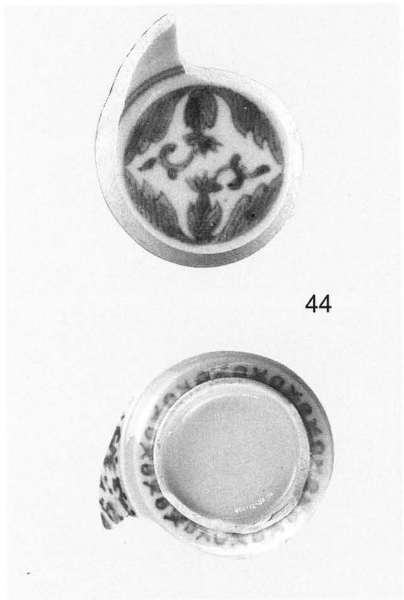

40

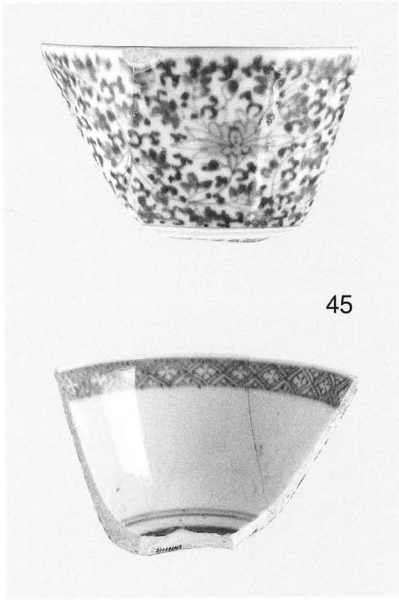

41

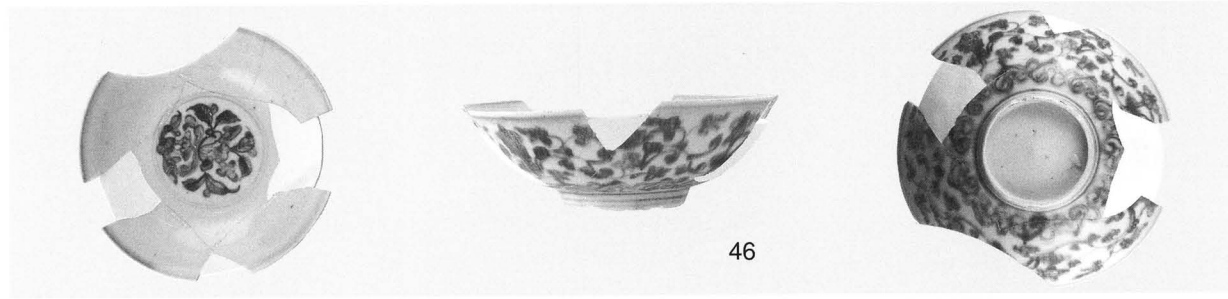
図版12

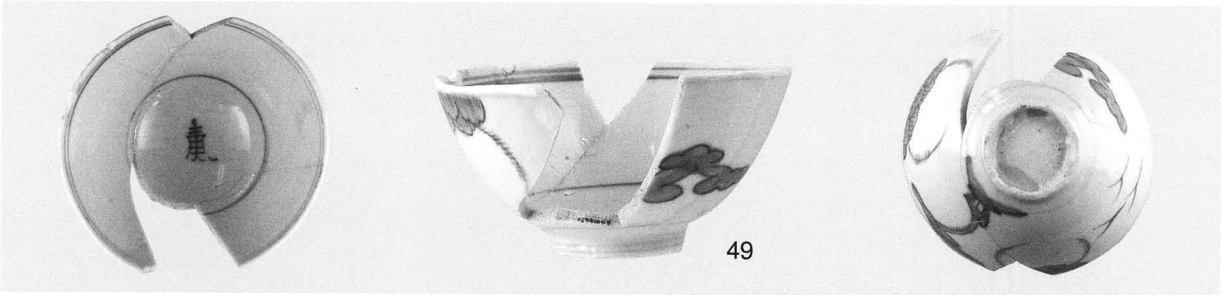


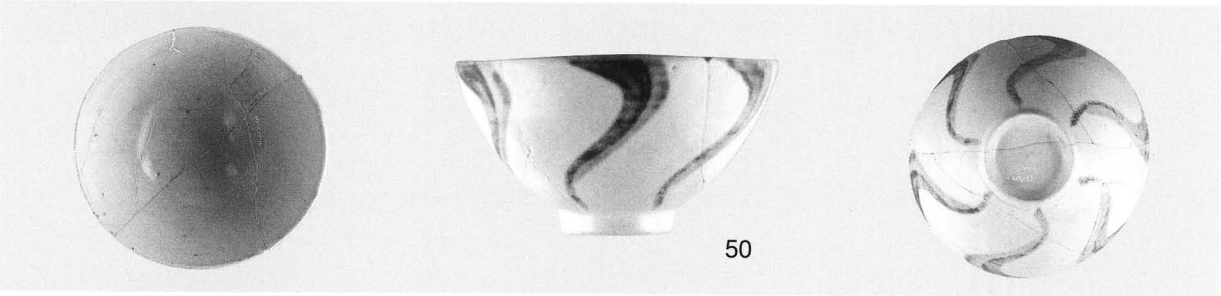


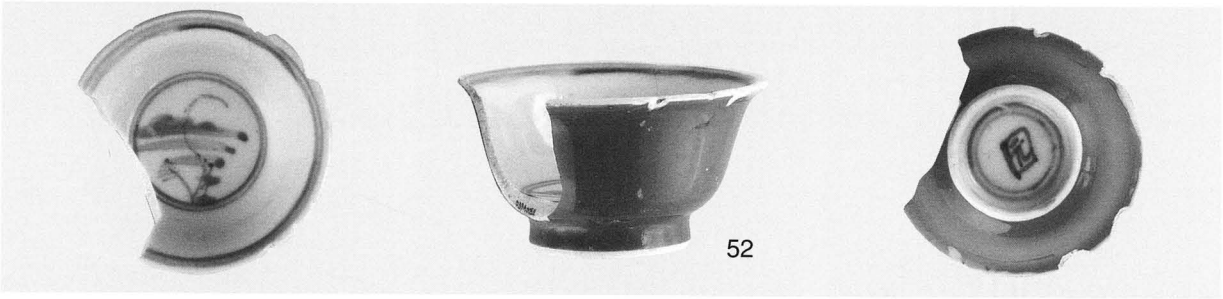


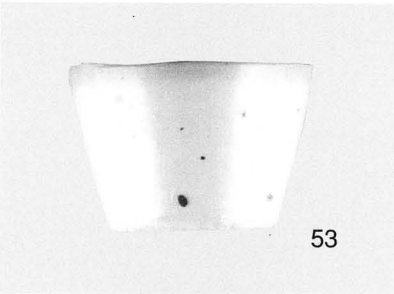


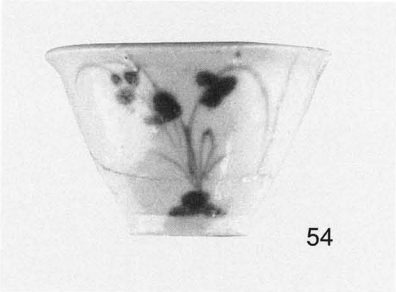


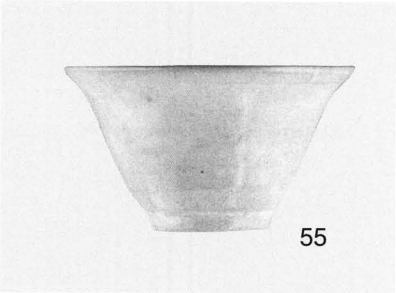

49

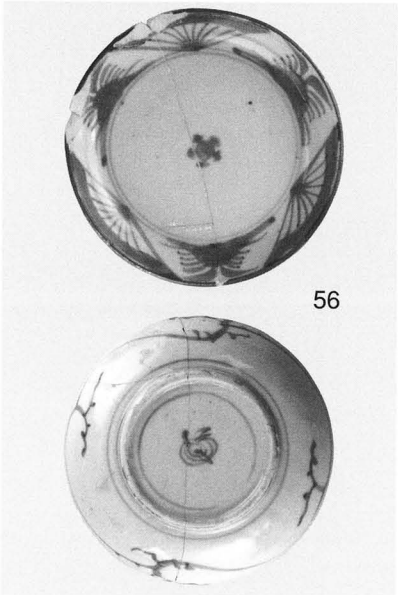

50

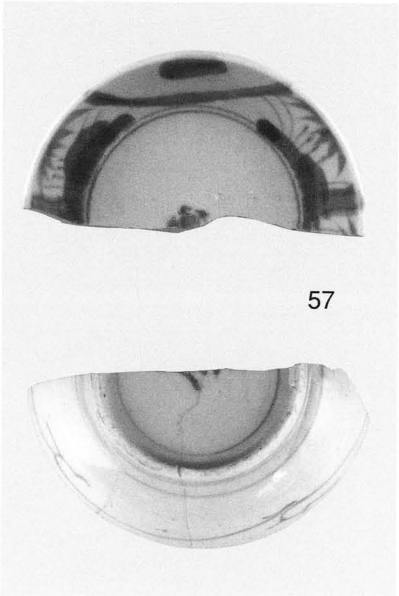

52

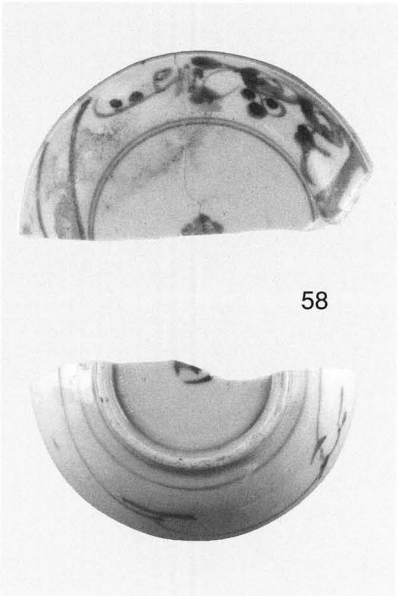

53


54

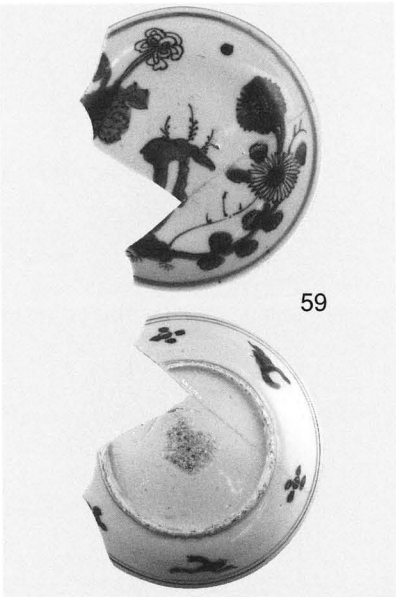

55

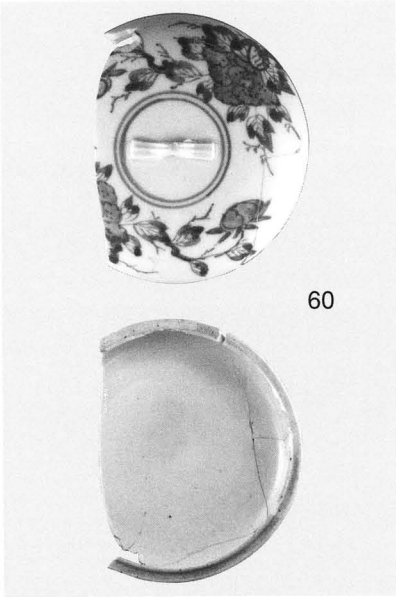

56

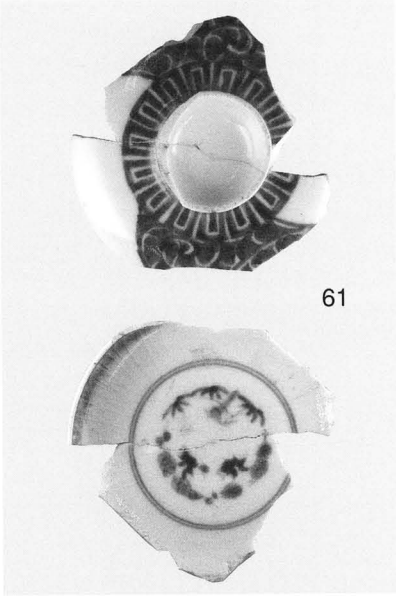

57

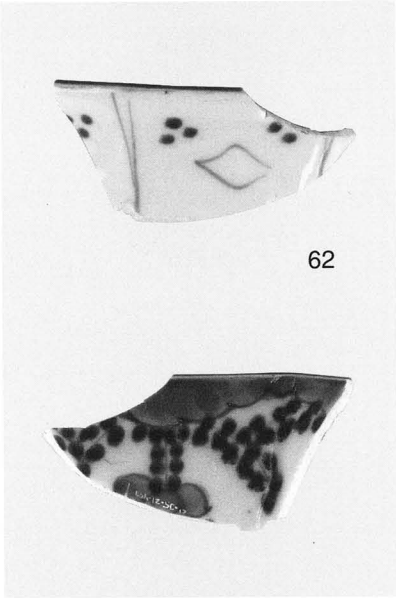

58

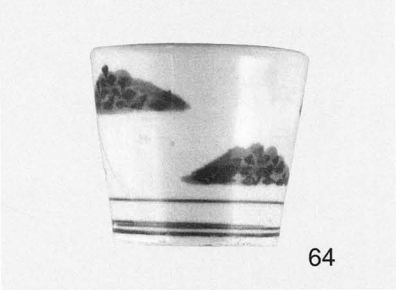
図版14

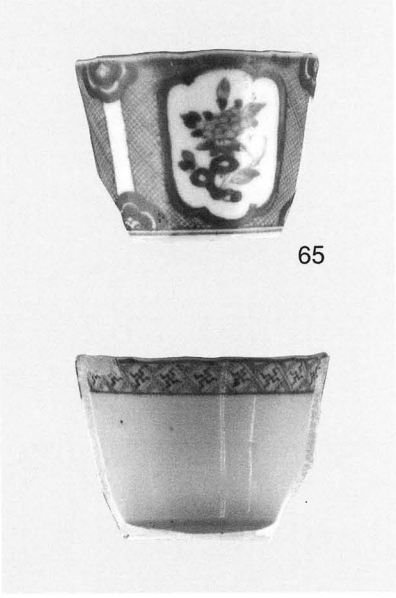

59

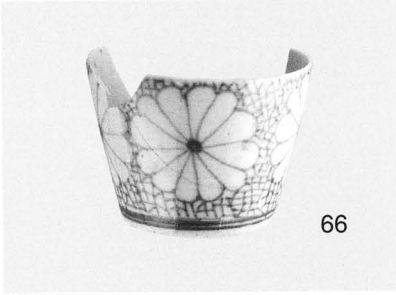

60


61


62

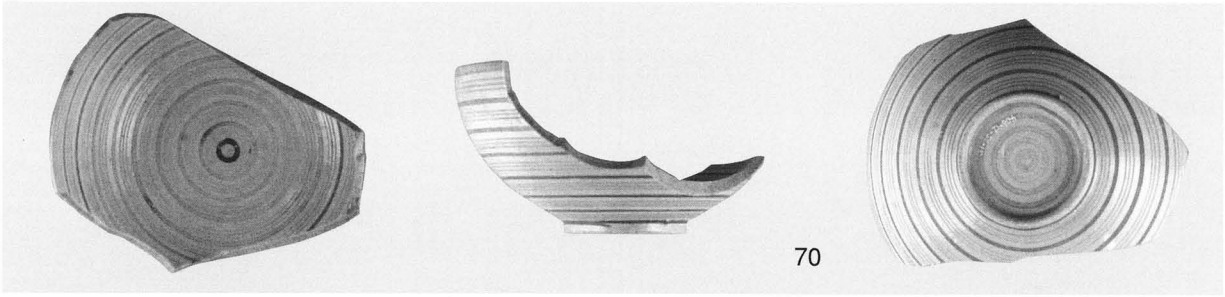

64

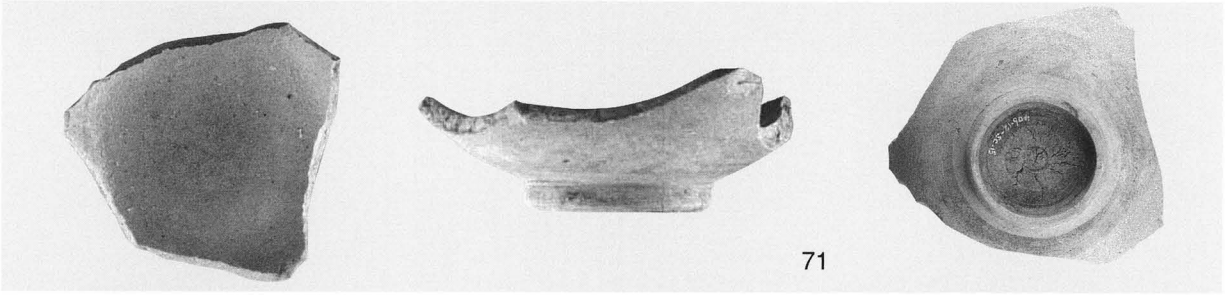

65

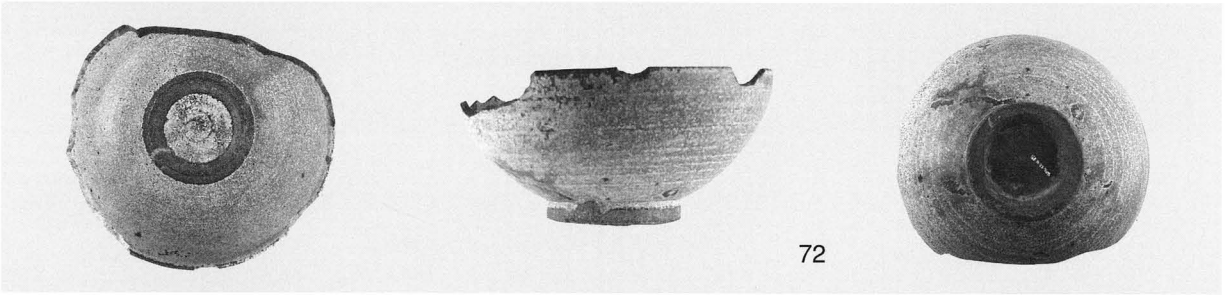

66

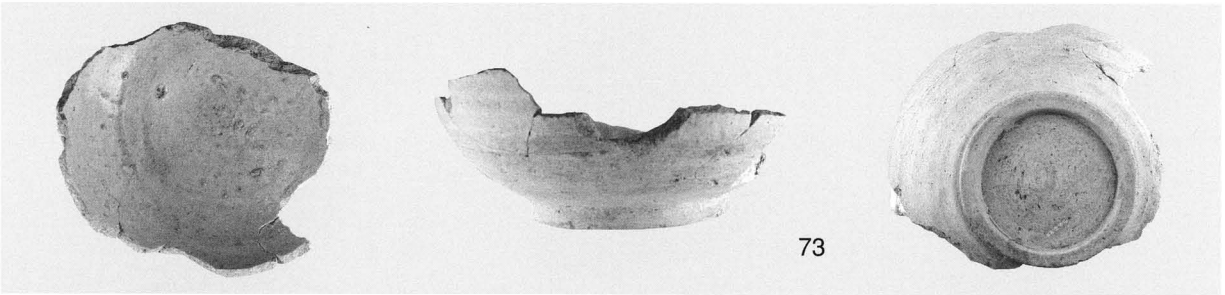
63

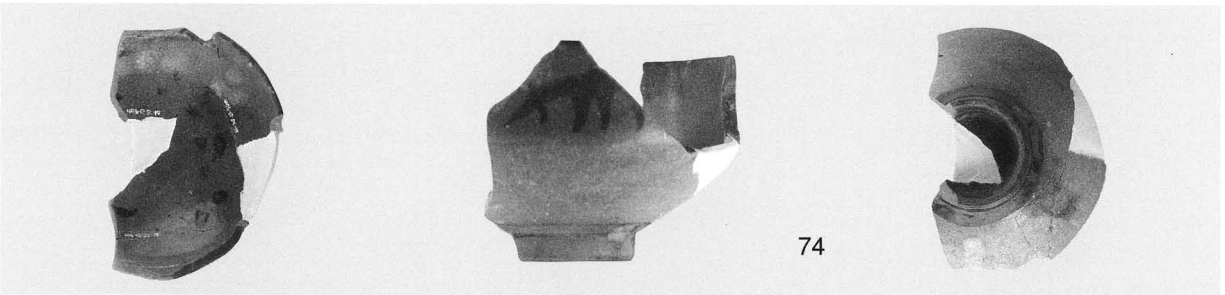
69

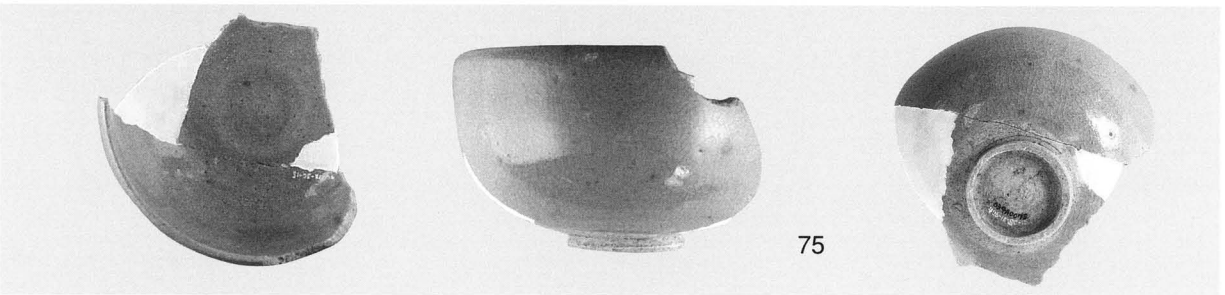

70


71

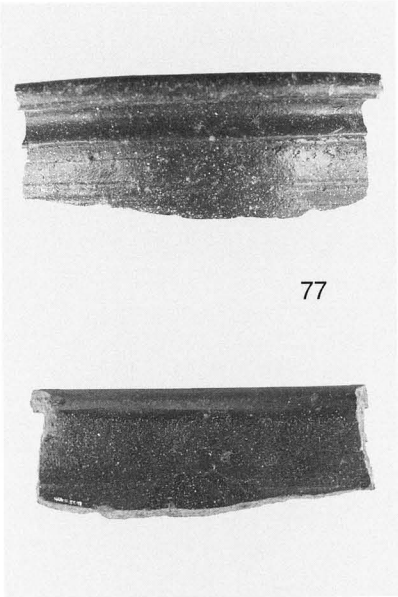

72

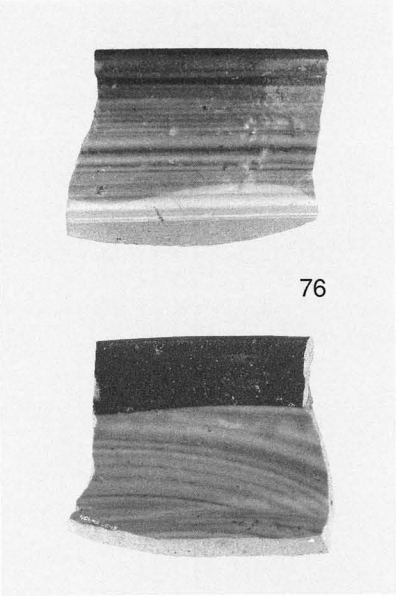

73

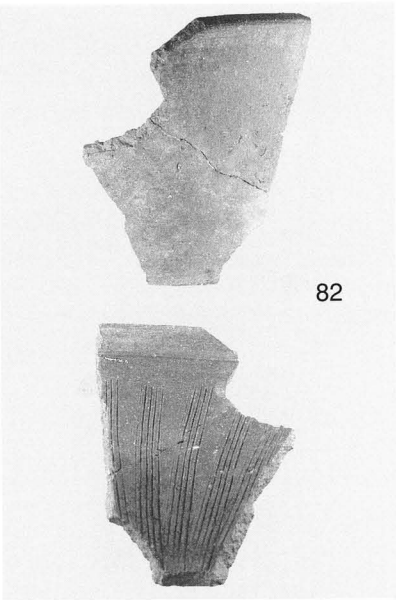

74

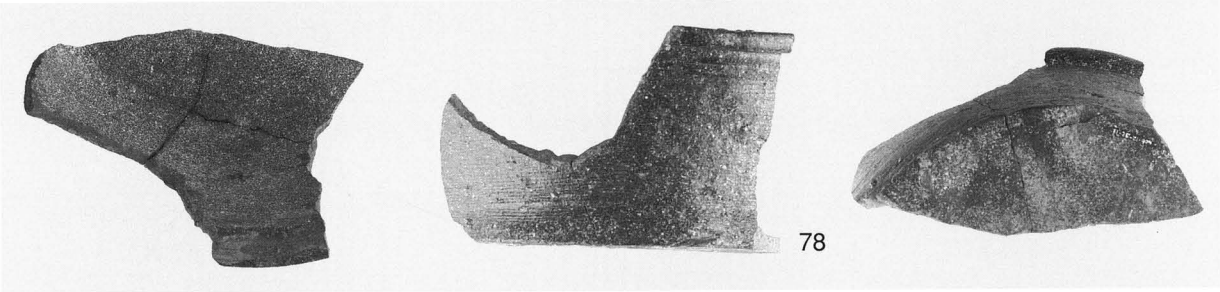

75

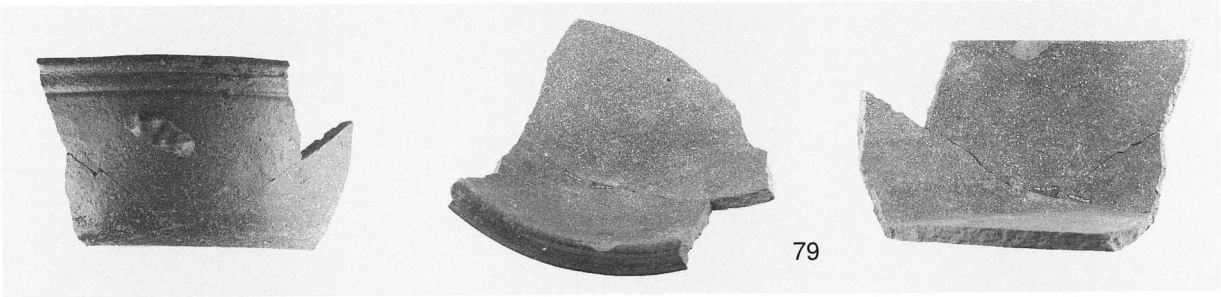
図版16

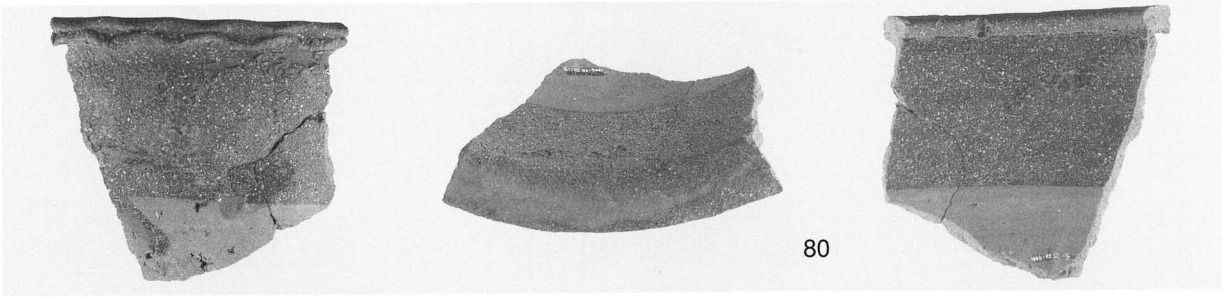


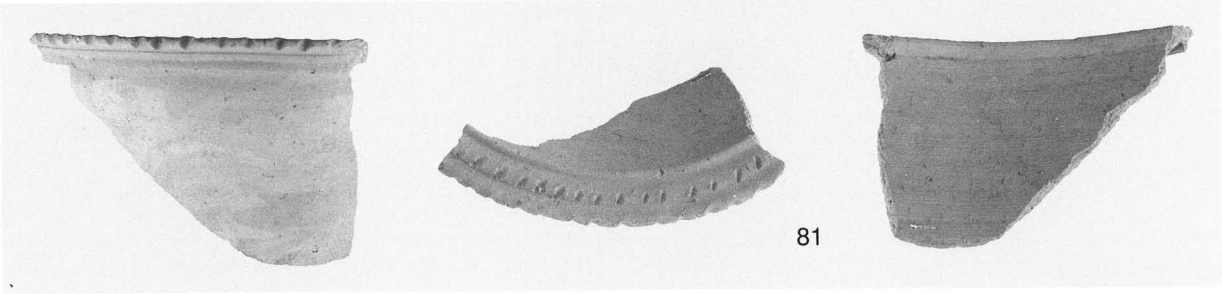


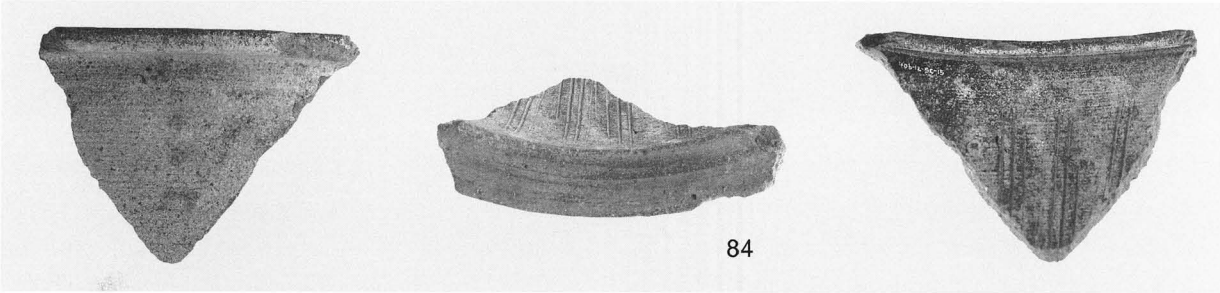


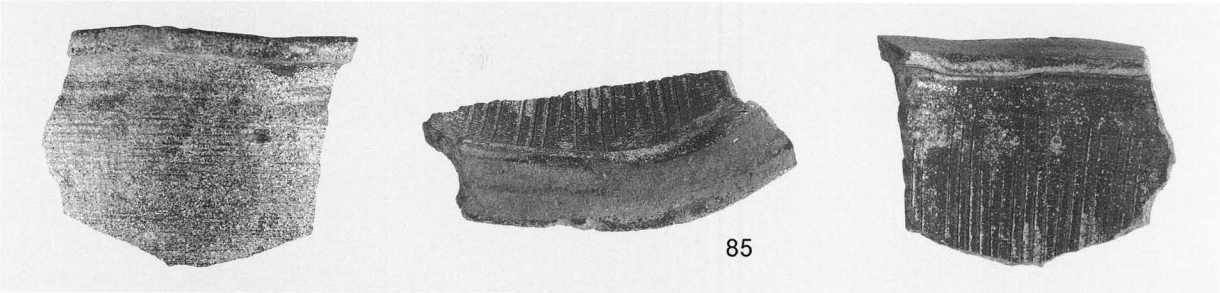


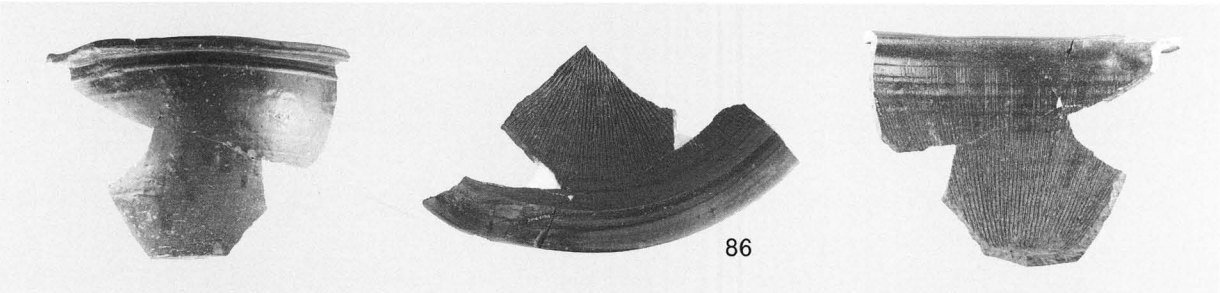


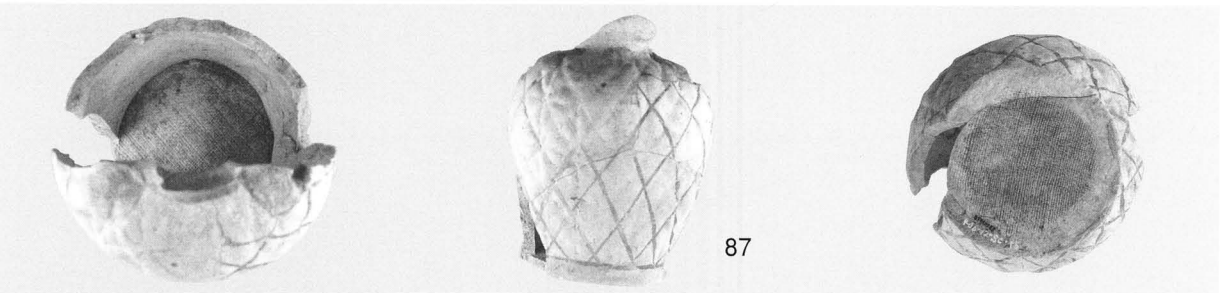


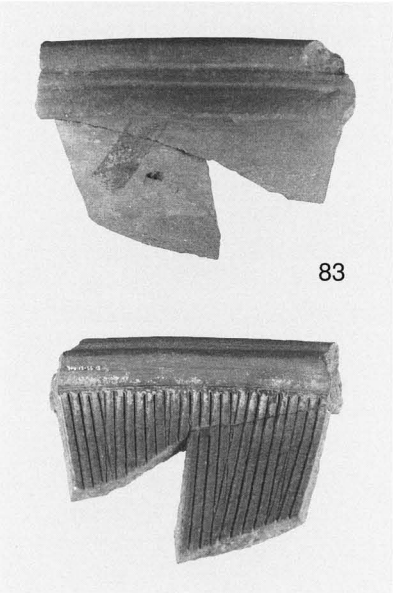


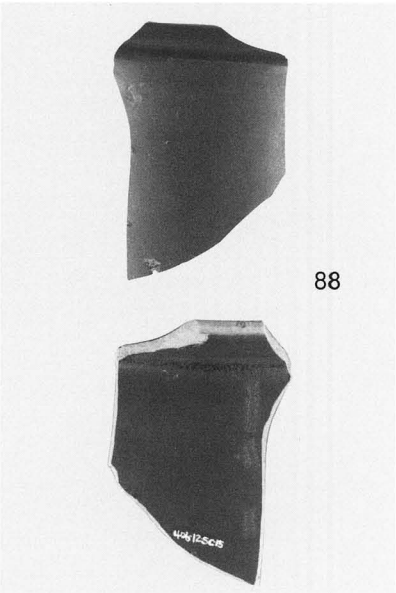

84

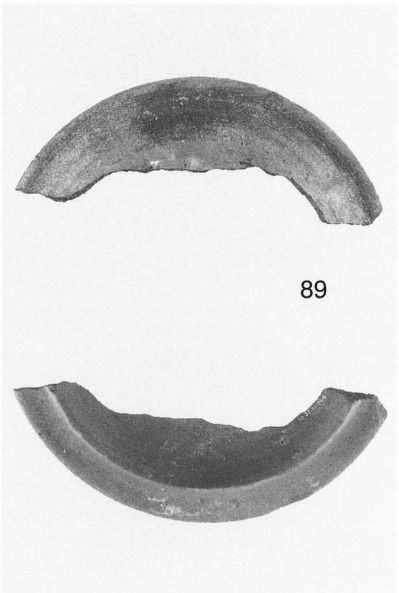

85


86

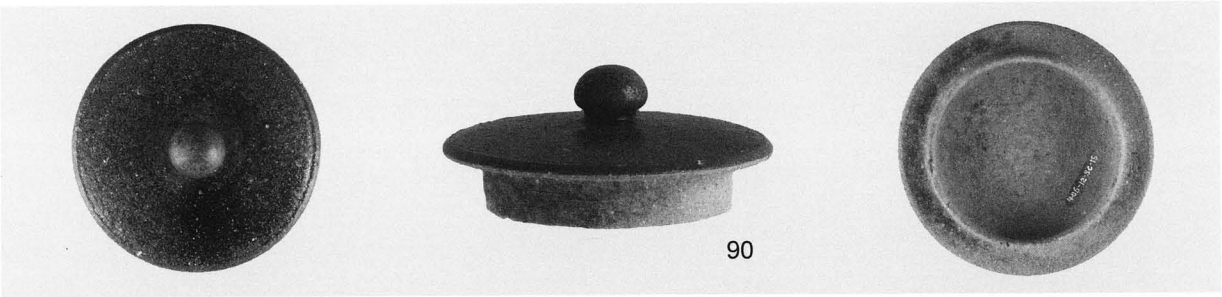

87

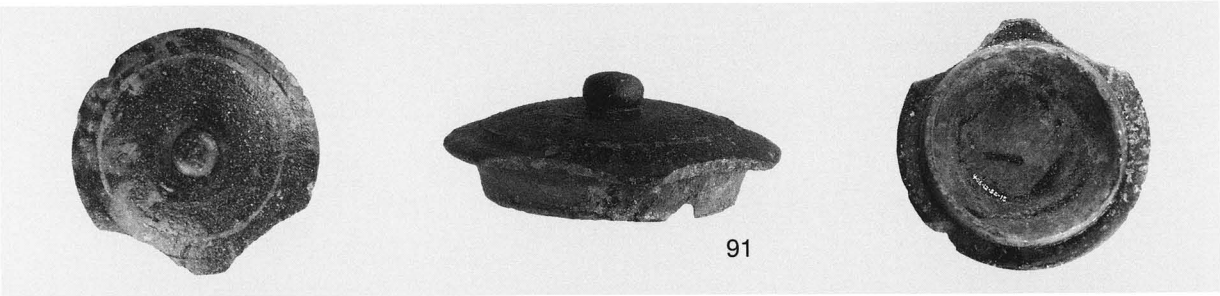

83

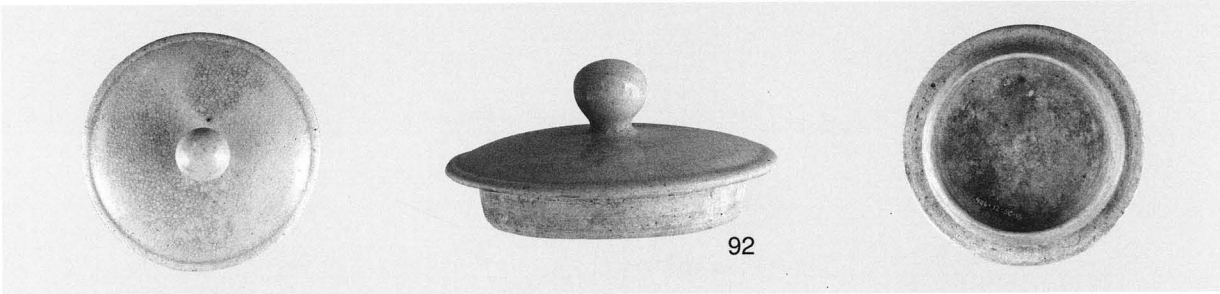

88

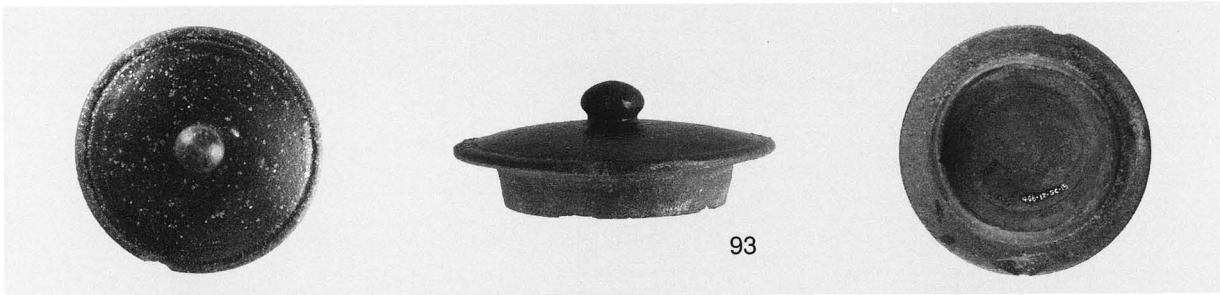

89

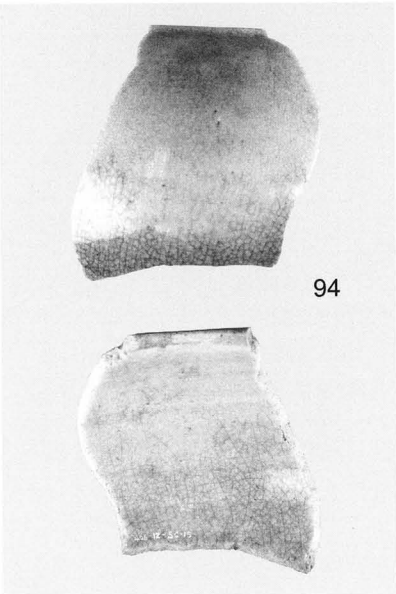
図版18

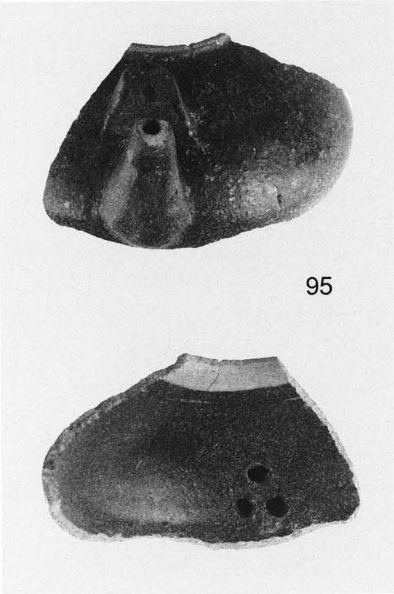


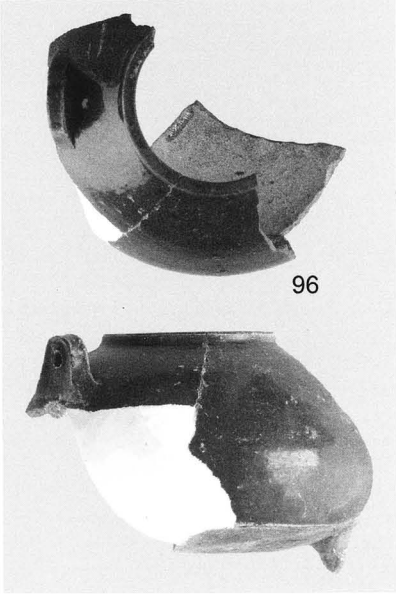


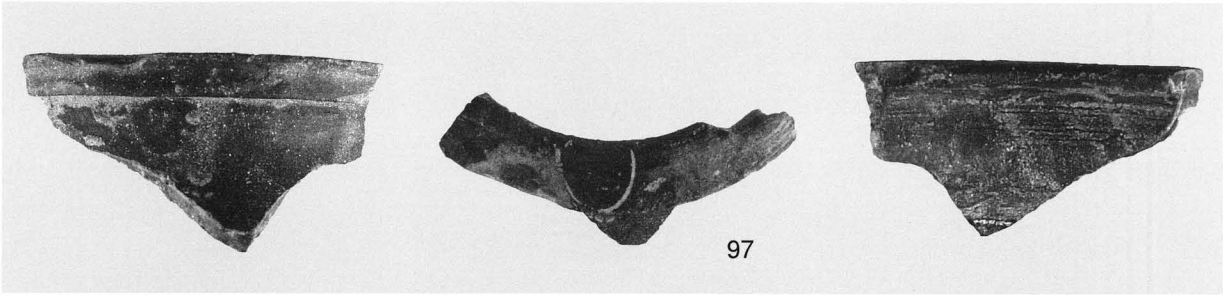


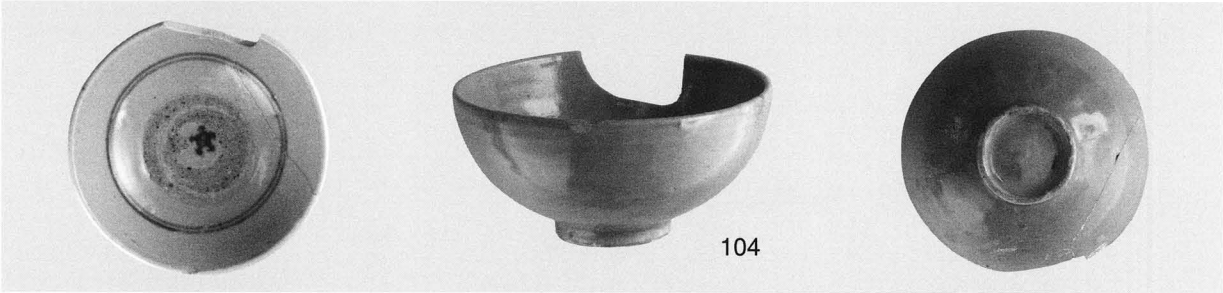


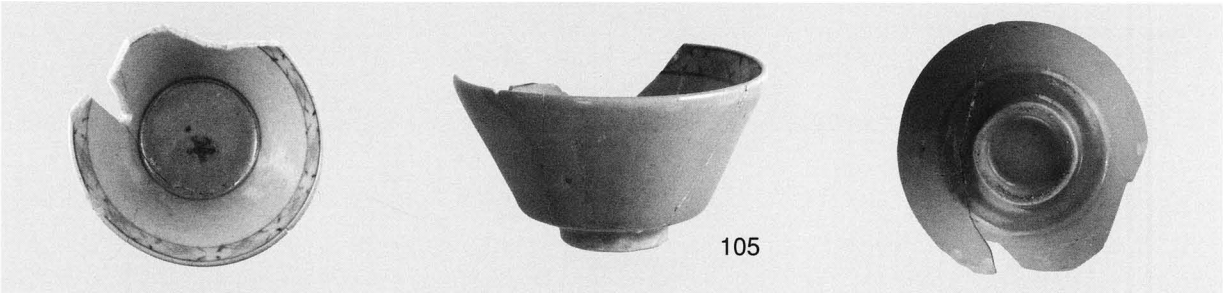


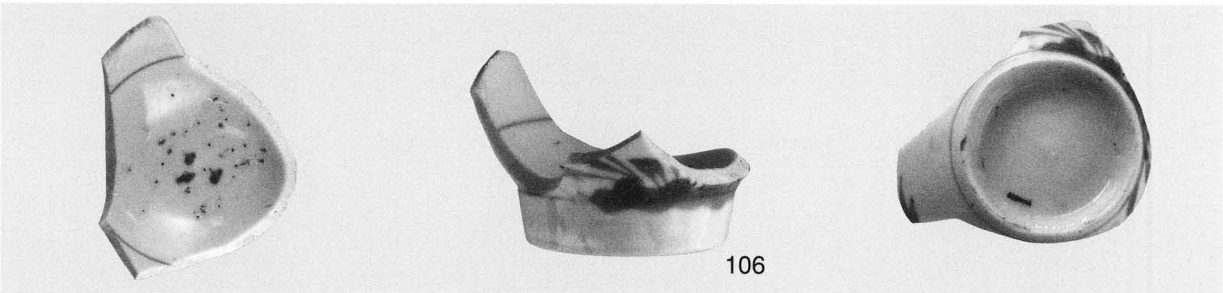




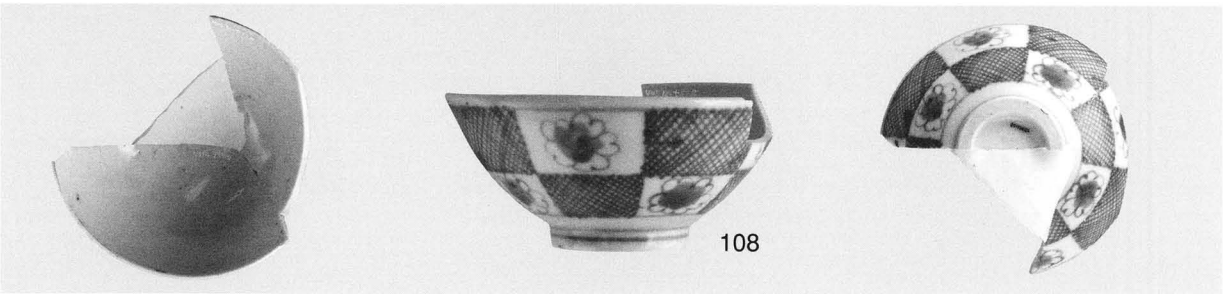

97


104

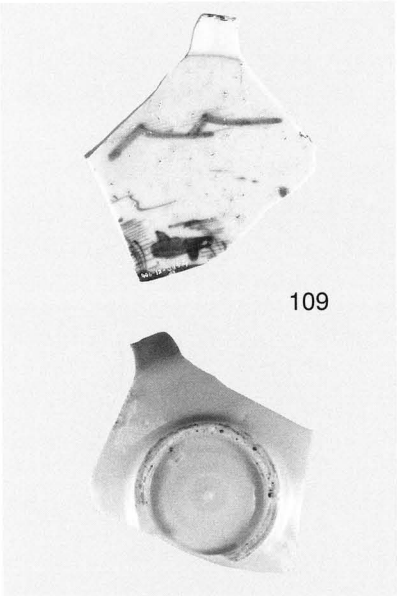

105

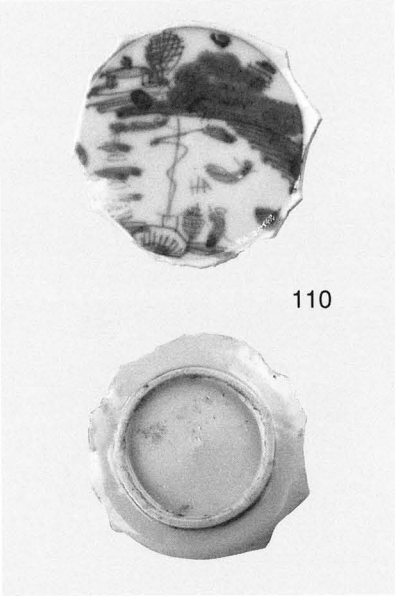

106

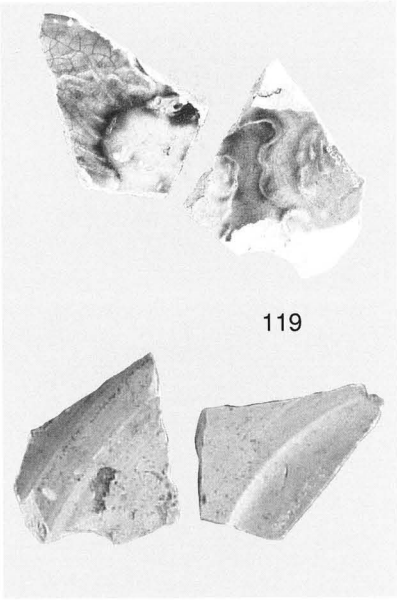
107

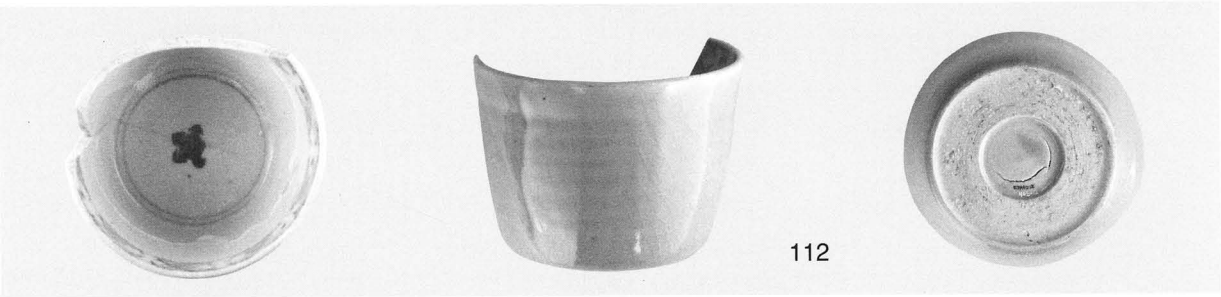

108

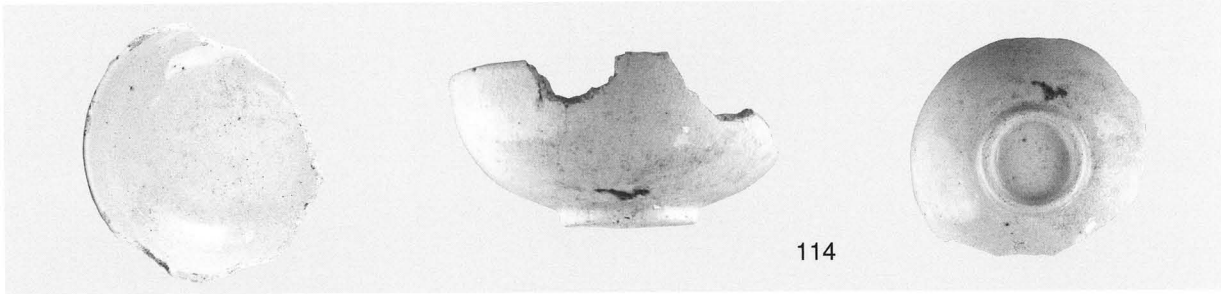
図版20

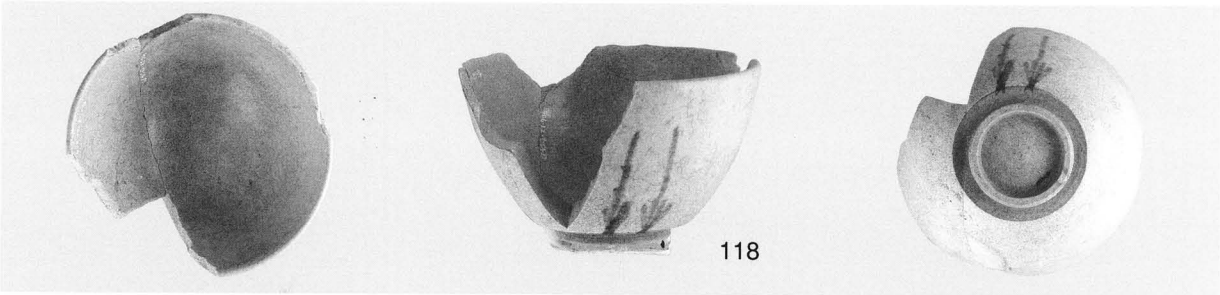


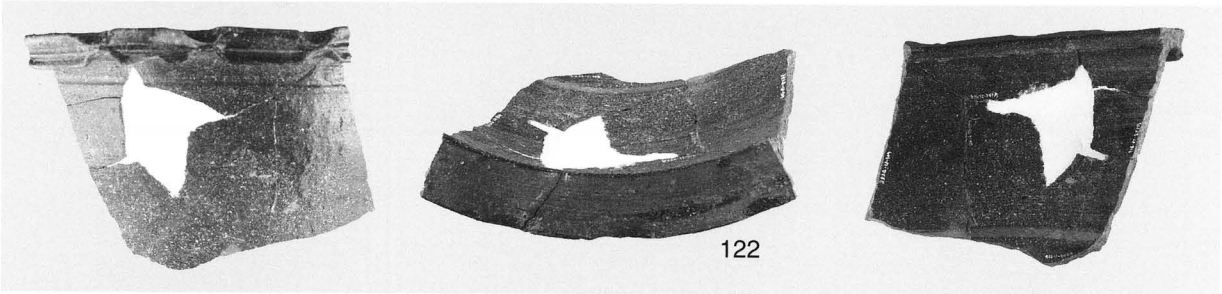


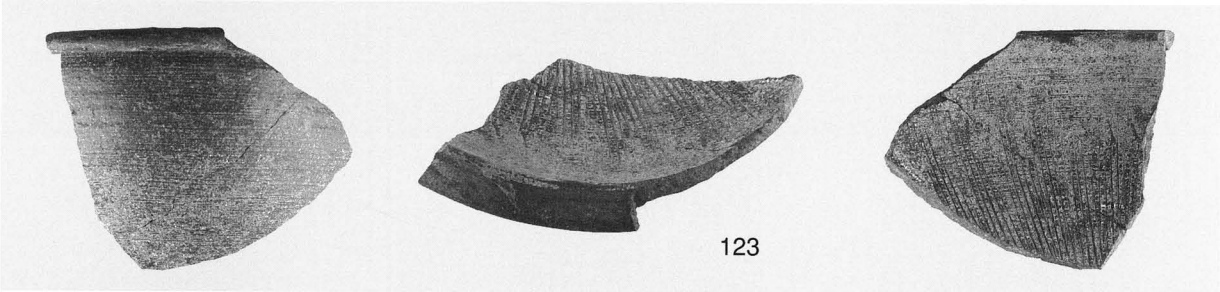


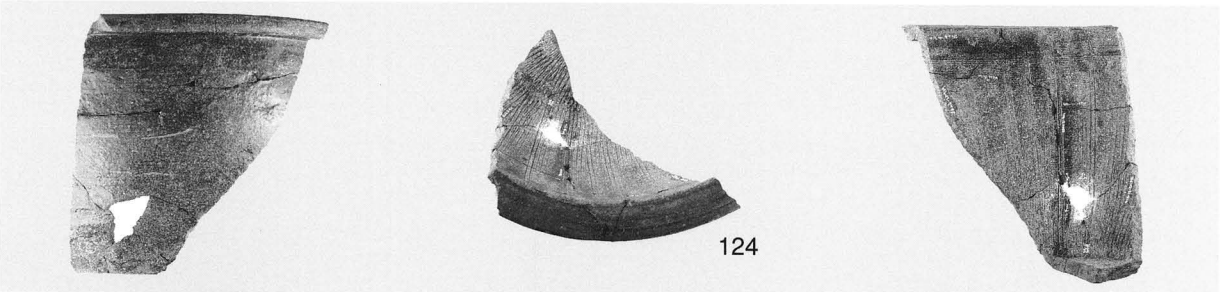


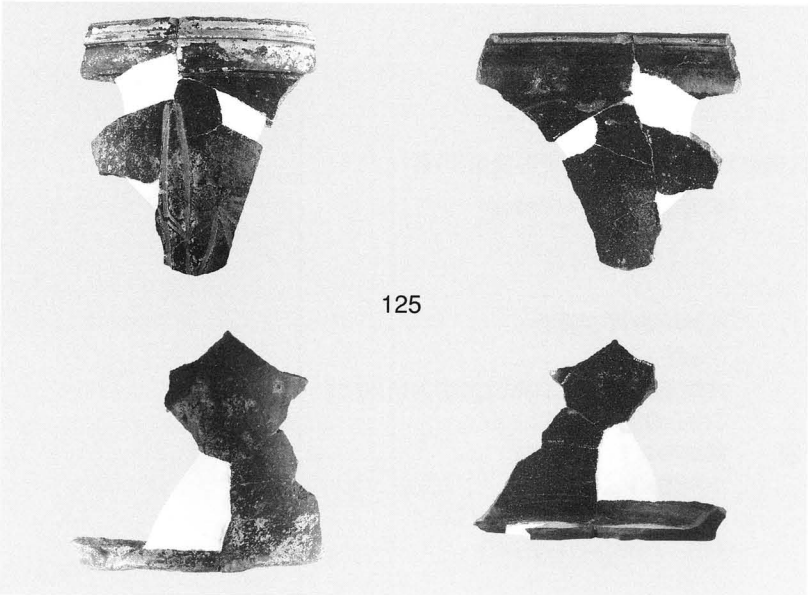


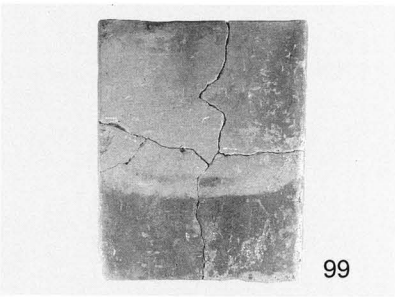

118

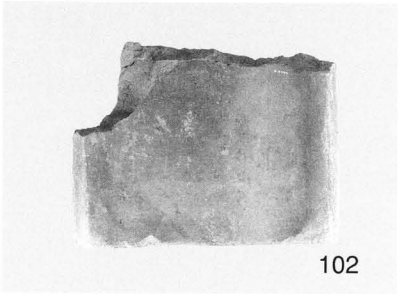

122


123


124


125


99


102

高岡町埋蔵文化財調査報告書第39集

高岡麓遺跡（12地点）

2005年３月

編集・発行　高岡町教育委員会
〒880-2292
宮崎県東諸県郡高岡町大字内山2887
TEL. 0985-82-1111

印　　刷　株式会社宮崎南印刷
〒880-0911
宮崎県宮崎市大字田吉350-1
TEL. 0985-51-2745